れない自分が嫌になつた。

三

「かうして、自分の撮つたものが、だん〳〵形を現はして來るのは、何度やつても愉快なものですよ。」

日置は陶器の皿の中の現像液に浸したフイルムが、だん〳〵黑白の區別を見せて來るのを見つめて云つた。

朱實は、だまつて日置の手許を見てゐたが、輕く驚きの聲を發して、

「あら！」

と、云つてフイルムに顏を近づけた。

「これ、私の家ぢやなくつて！」

と云つた。フイルムの一コマはたしかに朱實の家を映したものだつた。

「さうですよ。」

からかふやうな笑ひを含んだ日置の大きな眼が、赤い電燈の光を受けて、燃えるやうに、朱

實の眼を見返した。

「今日、午後海へ行く道で貴女の家を撮つたのですよ。貴女の家なら知つてゐた。しかし、あの家に貴女のやうな美しい人がゐるとは、思はなかつた。」

「まあ……そんなお世辭はいや。」

朱實は、つい馴々しい言葉遣ひをして、ハツと自分の動悸の昂まるのを覺えた。

「これ問題の寫眞でせう。」

と、先刻撮られた自分と秦とのフイルムを指した。

「さうですよ。」

と、日置は現像液の中から取り出して、電燈に透しながら、

「なか〳〵よく撮れてゐるでせう。」

と、フイルムを朱實の眼の前に、かざした。

一つのフイルムに見入る二人の肩と肩とは、互ひの呼吸が感じられるほど近づき、頰と頰とは、お互の暖かさが感じられる程だつた。

「秦さんが、少しハツキリしないわねえ。」

「貴女にピントを合はしたからですよ。」
「でも默つてお撮りになるなんて失禮ね。」
「ほんたうに、さう思つてゐるんですか。」
ゆつたりと、例の少し押しつける口調で答へて、日置の眼は挑むやうに、朱實の眼に見入つた。
上氣して頰が赤くなつてゐる朱實は、グツと押して來るものを押し返すやうに、あらん限りの少女の力を、兩眼にこめて見返した。
「誰だつて失禮だと思ふわ。無作法だわ。」
「でも、僕があんな風に寫眞を撮らなかつたら、貴女とこんなに急に親しくなれませんでしたね。」
その事を、朱實自身も欣んでゐるに違ひないと、信じてゐるやうな顏付であつた。
朱實は、だまつてしまつた。
日置も、少し云ひすぎはしなかつたかと思つて、だまつてしまつた。
芝生の庭からは、人々の笑ひ聲が、時々閉め切つた部屋に響いて來た。

日置は、朱實の大柄な浴衣のふくらんだ胸のあたりが、波打つのを見た。可愛い唇が、何かを待つやうに、をののいてゐるのを見た。
今、この女を抱き占めれば、きつと眼を閉ぢて、必ずその唇を許すに違ひない。
だが、彼はさうしたくなかつた。
「暑いですね。外へ出ませう。これは、燒き付けてから進呈します。」
彼は、何氣なく先に立つて、その部屋を出た。
朱實の一時的興奮に乘ずることは、本當に朱實の心を自分のものにする確かな方法でないと考へたからである。
庭へ降りた時に彼はさゝやいた。
「秦君は、貴女の戀人ぢやないでせうね。」
「まあ……何うしてそんな事お訊きになるの？」
と、朱實は一寸氣色ばんだ。
「だつて、今日の容子は、一寸戀人同志の姿勢でしたよ。」
「まあ、いやだ！　何でもありませんわ。」

朱實は、可なりハツキリ否定した。

映畫が終つてから、朱實達は涼みがてら、海岸を廻つて家に歸つた。

秦は、一日の中に、日置が忽然として朱實の前に現はれ、自分が二年以上かゝつて培つた親しさ以上の親しさを朱實に、感じさせた事を考へると、胸が燃えるやうに苦しかつた。

朱實は朱實で、日置に對して感じた惹きつけられるやうな魅力の事を考へてゐると、弟との會話に、トンチンカンな返事ばかりしてゐた。

四

秦は、教授の著作の手傳ひをしてゐるので、一週間の中三日は東京へ歸らなければならなかつた。

日置に逢つた翌日東京へ歸り、四日目に逗子に來て見ると、日置と朱實は、すつかり打ち溶けてしまつてゐた。(日置さん)が、(眞一さん)に變り、(清水さん)が(朱實さん)になつてゐた。再び東京へ歸り、又逗子へ來て見ると、二人は前以上に馴々しく、二人だけにしか分らない冗談を云ひ合つて、樂しさうに笑ひ合つたりしてゐた。

秦は、だん〳〵二人の世界から、遠くへ〳〵と押しやられてゐる自分の姿を見た。

朱實は、秦を尊敬してゐた。秦の精神的な美しさや、鋭い理性や豊かな感受性をほのかに感じて、それを優れた立派な素質だと思つてゐた。だが、それだのに、長い間、交際つてゐても、ある程度以上に、打ち溶けることが出來ず、親しむことも出來なかつた。彼が、神聖なもの、それ丈に、けむつたいものゝやうに感じられて、ピツタリと身を寄せて、樂しみ合つたり喜び合つたりすることが出來なかつた。

ところが、日置は全然違つてゐた。彼には、秦のやうな奥ぶかいものはなかつた。その代りに都會的な洗練された輕快さと明朗さがあつた。朱實が遠慮の垣を結ばうとしても、日置はどん〳〵それを壞して、近よつて來た。一しよに居ても少しも肩が凝らず、冗談を云つて笑ひながら、朱實の氣は、何時の間にか、彼の氣とむすび付いてゐるのであつた。秦が、何時も陰を好んで考へ込んでゐる時、日置は太陽の下で、嬉々として躍つてゐる。

日置と一しよにゐる時の朱實は、秦と一しよにゐる時の彼女とは、別人のやうであつた。まるで、水を獲て躍る小魚のやうであつた。

「君も泳がないかい？」

誘はれても秦は泳がなかつた。

海の近くで産れた秦は、泳げば一里位は、樂々と泳げるのだつたが、朱實の前に貧弱な裸體を見せたくなかつた。殊に日置の立派な肉體に比べられるのは、思つた丈でも全身が赧くなるやうな氣がした。

「本當に秦さんも泳ぐといゝのにねえ。」

と、云ひわけをしながら朱實は日置を追うて、もつれ合つたり、水をかけ合つたりしながら、二羽の水鳥のやうに、グン〳〵沖の方へ出て行つた。

大きな波に、二人が押し返されたり、水を飲んだりして、笑ひ合つてゐるのを、秦は惱ましい氣持で見てゐるのだつた。

そんな一日だつた。

その日は、進も加つて水球を持ち出して遊び戯れてゐた。

「ボールの取りつこをしよう。」

と、日置が提案した。

「やりませう。」

朱實が贊成した。

「進君は？」

「僕は、少し休んでから。」

と、云つて波打際の方へ海の中を歩いて行つた。

「ぢや、朱實さんとやらう。僕が向ふへ投げるのを合圖に追つかけるんだよ。君に、三間位ハンデキャップをやらう。もつと前へ出てゐたまへ！」

「三間もハンデキャップを貰つたら、私が勝つに定まつてゐるわ。」

「ふん。どうだか。」

「きつと勝つわ。」

「ぢや、賭をしよう。」

「えゝ、いゝわ。」

「それぢや、僕が負ければ、貴女の無理は何でも聽く！　貴女は？」

「私も、さうするわ。」

「本當？」

「本當だわ。」
朱實は、小麥色に燒けた美しい頰に、微笑を湛へてゐる。
「僕の云ふもの呉れる？」
「上げる。」
「よし。」
元氣よく叫ぶと、日置はパッと水球を七、八間彼方に投げた。
パッと水を叩いて、二人は先を爭つたが、日置が辛うじて、朱實を追ひ拔いて、水球を手にした。
「口惜しいわ。」
「ぢや、もう一度やらう。」
今度は、朱實も猛烈に頑張つたが、先きに行く朱實を押し除けるやうにして、日置が水球を奪つてしまつた。
三度目は、朱實はすつかり疲れてしまつて、決定的に日置の勝だつた。
「さあ僕が三度勝つたよ。」

やつと水球の所へ來た朱實に、云つた。
同じ水球に捕まつて立ち泳ぎをしながら朱實は素直にうなづいた。
二人は、相當沖に出てゐた。
危險の赤旗がすぐ近くにあつた。近所には、誰もゐなかつた。
岸にゐる秦の姿も、其處からは、ハッキリとは分らない。
ちらつと、岸の方を見てから日置が云つた。
「ぢや、僕のほしいものを云ふよ。」
「……」
朱實は、無言でうなづいた。
「云ふよ。」
じッと朱實の眼を見て、念を押してから、日置が右手の人差指で、水球にYと云ふ字を書いた。
「分る？」
「えゝ。」

次ぎはOと書いた、次ぎにU、次ぎにRと書いた。

「分る？」

「分る。貴女のでせう。」

朱實は、云つた。

波に搖られながら、日置は今度は、少し早く書いた。HEART！ それは、ハート（心）と云ふ字であつた。

通じて、（貴女の心）と云ふ意味だつた。

そして、水の中で、不意にぐつと、朱實の手を握つた。

「今直ぐ返事して下さい。イエスかノウか……」

「……」

「直ぐ、ほら進君が泳いで來ます。返事して下さい。イエスと云はないと進君が來ても、手を離しませんよ。」

「とにかく手を離して……」

「ぢやイエスですか。」

日置は、グツと力を入れて握りしめた。

「姉さん歸らう。」

進が五、六間の所へ來た。

「離して……」

「ぢやイエス……」

朱實は、水の中で身もだえして、日置から離れようとした。

「イエスと云つて下さい。」

「ひどいわ。そんな分り切つた事訊く人！」

さう云ふと、朱實はサツと手をふりほどいた。

「ふん……」

日置は、滿足げに微笑すると、近づいて來た進に云つた。

「進君 岸まで競泳しよう。」

五

引き潮の海が、月の光にキラ〳〵と生き物の膚のやうに輝いてゐた。何處かの別莊の庭からブランコの金具の、キイ〳〵ときしむ音が、きこえて來る外は、さゞら波の音がかすかにきこえる丈であつた。

秦は、話があると云ふので、日置から海岸を一しよに歩くやうに求められた。立派な體格の日置が、白い浴衣を着て、心持ち先きに立つて、サク〳〵砂を踏んで歩いた。

秦には、日置の話し出すことが、ほぼ豫想されて、心は鉛のやうに重かつた。

やがて、日置が口を切つた。

「君も大體察してゐてくれるだらうと思ふが、僕は朱實さんと、結婚することにしたよ。朱實さんの方がよければ、在學中に式を擧げるつもりだ。」

「……」

「朱實さんも承諾してくれた。たゞ在學中と云ふことでは、僕の家で少し反對するかも知れぬが、押し切るつもりだ。多分、僕の家でも、贊成してくれると思ふ。だから、順調に進行すると思ふんだが、君の紹介で、朱實さんと知り合つたわけだから、僕として諒解を得て置きたいんだ……」

秦は、かうまで話が進んでゐるとは、思つてゐなかつたので、狼狽したが、しかし冷靜を裝つて、

「諒解つて……」

と、訊き返した。

「僕は最初、君も朱實さんを好きなのぢやないかと思つて、その點を心配したんだ、それで念のために朱實さんに訊いて見たんだが、朱實さんは、君を眞面目な方として尊敬してゐるが、戀愛的な氣持なんか、ちつともなかつたと云ふんだ。……それで、君もきつと僕達の婚約を喜んでくれると思ふんだが……」

秦は、足下の砂の中に、このまゝ、ズル〳〵と滑べりこみさうなほど、身體からあらゆる精氣が一時に拔け落ちたやうな氣持だつた。

が、彼は妙に上ずつた聲でさり氣なく云つた。

「うん、僕は朱實さんの事なんか、何とも思つてなかつた……」

と、少し云ひよどんでから、

「それはよかつた。」

と、しぼり出すやうに云つた。自分でも、何がそれでよいのか分らずに云つた。云ひ終ると、無限の悲しみが押し寄せて來て、眼が燃えるやうに、あつい涙が盛り上つて來た。

「さうかありがたう。僕は、君が朱實さんを僕に紹介してくれたことを感謝したいんだ。今度君に事件でもあれば、お禮の意味で、どんな力にでもなるよ。」

日置は、眞面目になつて云つた。

それを聞いた秦は、日置が居なければ、わつと聲を立てゝ泣きたかつた。

涙を流すまいと、じつと齒を嚙んでゐると、悲しみが一層强く、こみ上げて來るのだつた。頰が冷たく濡れてゐた。

「用事は、それ丈なのだ。もつと、散歩しようか。」

日置が立ち止つて云つた。

「いや、一寸用事があるから僕は失禮する。」

日置と離れると秦は、一ヶ月ほど前、朱實と二人でゐるとき、初て日置と會つた崖の上へ馳けつけると、大聲で泣いた。波の音に向つて、泣いた。大聲で、泣ける丈泣いた。

その翌日、秦は東京の用事のために、逗子を去つたが、それぎり逗子へは、歸つて來なかつた。八月が過ぎ、清水一家が東京へ引き上げた後も、秦は朱實の家に現はれなかつた。一度進が、秦の下宿へ問ひ合せのハガキを出したが、受取人居所不明で返つて來た。

日置は、泰の事が、氣にかゝり、九月の末頃本郷通で逢つた二人の共通の友人に訊いて見た。すると、その男は、

「病氣ぢやありませんか。學校へも見えませんよ。」

と、無造作に答へた。

日置は、秦が朱實を愛してゐた事を、マザ〳〵と知つた。秦が、朱實を愛しながら、內氣さのために、何うにも自分の氣持を現すことが出來ないで居る所へ、日置が風の如く現はれて、朱實を秦の手から攫つてしまつたのだ。

氣の毒な事をしたと思つたが、惡い事だとは思へなかつた。

「結局は、性格の問題だ、彼の性格では、朱實さんと結婚しても、二人とも不幸になるのだ。性格と性格との適合しない悲劇なのだ、俺のせゐぢやない。」と、日置は自分で安心しようと努めた。

六

日置が朱實と結婚してから、十年の月日が流れた。

日置は、順調に人生のコースを辿つてゐた。

醫科を出てから、一年半ばかり助手をしてゐる内に、奉天の醫學堂に教授として聘せられた。其處で書いた博士論文が、苦もなく東大の教授會をパスして、三十と云ふ若さで醫學博士になつた。間もなく、母校の解剖學の教授が、停年で退職したので、その後任として彼は東京へ呼び返された。

父の經營してゐる日置病院も、新しい病棟を建てまして、盛大にやつてゐた。

朱實との夫婦仲も圓滿であつた。七つの男の子と三つの女の子が生れてゐた。

彼は、申分のない人生の成功者であつた。

たゞ、彼に少しでもにがい思ひ出があるとすれば、秦のことであつた。朱實を彼に奪はれたために、人生そのものにも、もろくも破れ去つた秦のことであつた。餘りにもろく抵抗力のない相手であつた丈に、却つて彼の心に殘した後味は、わるかつた。

朱實も秦のことを、時々氣にしてゐるやうであつた。が、彼には秦のことは、一言も云はなかつた。彼も、妻に對して、秦のことは、一言も喋べらなかつた。

が、彼は時々、秦のことを考へさせられた。秦の消息を、それとなく求めた。が、左傾してゐるとか、鄉里へ歸つて圖書館の事務員をしてゐるとか、とりとめもない噂ばかりであつた。

東京へ歸つてから、二年目の十二月の半であつた。彼は、青山の自宅から、本鄉へ自家用車を飛ばせてゐた。

ほのぼのとあたゝかい暖熱器に、足を溫めながら、窓外に走しり去る師走のあわたゞしい町角や、元氣なく黑ずんで歩く顏色の惡い行人の顏などをとりとめもなく見てゐた。

神保町へ來て「ストツプ」の信號に車が止まつた。

彼は、車窓に近く迫つてゐる安全地帶に立つてゐる人達の顏を見るともなく見た時、彼は思はず、

「あ！」

と、呻き聲を擧げた。

彼は、窓のガラスを急いでおろすと、

「おい！　秦君！　秦君！」
と、あわてゝ聲をかけた。
此の寒さにオーバも着ず、よれ〳〵の袷を着流して、眼丈をギョロギョロ光らしてゐる小男が、しよんぼり其處に立つてゐた。
「おい秦君だらう！」
日置が二度聲をかけると、やつと氣がついたらしく、サツと驚きの色が秦の顏をかすめたが、さすがに微笑をたゝへて、かすかに肯いた。
「おい！　一寸降りる。」
さう運轉手に云ふと、日置は身がるに車から降りた。
「やつぱり君だつたのか……」
と、日置が近づくと、秦はもうすつかり冷たい表情に返つてゐたが、まぶしげにうなづいた。
「しばらくだな。丈夫で居てくれたんだなア。ぜひ、一度君に會ひたいと思つてゐたんだ。今何うしてゐるの？」

眞情のこもつた日置の言葉だつたが、彼はひがみ切つた犬が、食物を貰ふ時だけちらりと見せるやうな表情を、かすかに漂はせた丈で、直ぐ自嘲的に口許を歪めた。
「とにかく、僕の車に乘らないか。久しぶりに話したいんだ、一しよに來てくれないか。ね、え君！」
日置は、心をこめて云つた。
「……」
だが、彼は固く口を閉ぢて、首を横に振つた。
「ね、遠慮なんかしないで、一しよに來てくれないか。」
「……」
秦の顏は、いよ〳〵冷たくなつた。
「どこかへ行く所なのか。」
「……」
秦は、强くうなづいた。
「晝飯でも喰ひながら、君の近狀を聽きたいんだが、何うしても駄目か。」

秦は、頑固に頭を振るのみであつた。
「殘念だなア。君、今何處にゐるの。何をしてゐるの。」
「……」
秦は、もう口を緘してゐるばかりでなく、その時止まつた電車に乘らうとするやうな態度を見せた。
「ぜひ、一度會つてくれないか。とにかく電話をかけてくれないか。やはり父の家にゐるのだ、ぜひ今晩にでも電話をかけてくれないか。」
と、日置は名刺を手渡したが、秦は素直に受け取つた。
「ぜひ、電話をかけてくれたまへ、待つてゐるよ。」
秦は、輕くうなづくと、發車しかけた電車に乘つてしまつた。
秦のあまりのみすぼらしさに、物質的に援助したい氣持を、口に出して云はうかと思つたが、生活に虐げられながらも、秦の彫刻的な立派な顏には、なほ精神的な威嚴が漂ひ、そんな失禮な申出を無言の裡に拒んでゐるのであつた。
日置は、心惜しくも秦に別れたが、その日講義してゐる間も、秦の事が絶えず、氣になつ

た。
その夜は、一寸した會合があつたが、缺席して家に歸ると、朱實に秦に會つたことを話し、今夜電話をかけて來るかも知れぬと云つた。
朱實も、秦に對する氣持は、日置と同じであるらしく、出來る丈暖く秦をもてなさうと、三人前の食事の用意をして、秦から電話がかゝるのを待つた。夫婦とも、自分の結婚の犧牲となつたものに對して、出來る丈の償ひをしたいと云ふ人間的な氣持だつた。
だが、秦は到頭電話をかけて來なかつた。
日置と朱實は、九時過ぎてから、冷きつた夕飯をたべた。
その翌日も、翌日も、夫婦は秦を心待ちに待つた。が秦は、遂に來なかつた。
日置は、學校への行き歸りに神保町を通る度に、秦のことを考へ出して憂鬱になつた。
夫婦は、秦の事については、またピツタリと口をきかなくなつた。

七

それから、また三年經つた。

東京では、近年稀な大雪の降つた翌日の午後であつた。

日置は、學生の解剖實習の指導のため、手術着に着換へ、爪かけのついた下駄に似たスリッパを穿いて、せまい階段を降りて行つた。

後からついて來る助手が、

「今日は、中年の浮浪者の凍死體です。」

と、云つた。

解剖室に近づくと、其處に集まつてゐる學生のざわめきが、筒抜けに聞えて來た。

「また、ルムペンか。近頃は、少女の死體はちつとも來ないなア。」

などと云つてゐる聲なども聞えた。

解剖室の扉を押すと、ムツとフォルマリンの臭氣が顏を打つた。

日置の姿を見ると、各自手術着を着た學生達は、サツと水を打つたやうに、靜まり返つて、解剖臺の一つを圍んだ。

その解剖臺には、屍體の液汁のしみ込んで茶色になつた布がすつぽりかけてあつた。

その傍の卓子には、解剖用の器具が、冷たい金屬の光を放つてゐた。

ドドツと屋根の雪が、すさまじい音を立てゝ落ちた。

日置は、科學者らしい冷靜さで、解剖臺に歩み寄ると、助手がパツと覆ひを取りのぞいた。

瞬間日置は、ギョツとした。あはや、二三歩後退りする所だつた。が、やつと踏み止まつて、その行き倒れの凍死者の顏を、マザ〳〵と見た。

眼は落ち込み、うすい髯が生え、鼻はそり立てたやうに高くなつてゐるが、紛ふ方なき秦だつた。

秦との戀愛の競爭に自分が、徹底的に勝つたため、もろくも、人生から落伍し去つた秦は、なほ自分の勝利への捧げものとして、その死體をさへ提供しようと云ふのか。

なぜ、そんなに慘めな敗け方をするのだ、なぜさうまでも、もろいのだ！

勝ち過ぎた悲しみが、……無抵抗な相手を、あまりにも踏みにじる哀しみが、日置の心を、さん〳〵に打ち碎いた。

「秦！」

日置は、心の中で叫ぶと、じつと合掌した。閉ぢた眼瞼の間からは熱い涙が溢れ落ちた。

解剖前には、いつも死體に對して默禱する習慣であるが、今日に限つて教授の哀悼があまり

にも深刻なので、學生達も、しんと靜まり返つて、中には手を合すものさへゐた。
「小野君！　今日の執刀は、君が代つてくれないか……」
日置は、理由も語らず、助手にさう賴んだ。
解剖が進むにつれて日置は、講義を始めたが、得意の獨逸語が、今日は途ぎれ〳〵で、頭の中からしぼり出されるやうに苦しげにきこえた。

八

重苦しい胸を抱いて歸つて來ると、朱實は、いそ〳〵と彼を玄關に迎へた。
「御存じ、今日は貴君の御誕生日よ。」
「うん。さうか。」
日置は、ニコリともしなかつた。
「何かおありになつたの？」
「いや別に……」
妻の顏を見ると、秦の事は、どうしても口に出來なかつた。

「何處かお悪いの。」
「いや。」
「貴君が、お出かけになつてから、貴君のお誕生日だと云ふことを思ひ出して、大急ぎで支度しましたの。」
妻が、心づくしの食卓も、可愛い子供達のさわぎも、日置の心を少しも、浮き立たせてはくれなかつた。
子供達が寢た後、夫婦は茶の間で、差し向ひになつた。
「貴君のお誕生日だから、貴君の赤ちやんの時の寫眞を見てゐましたの。」
朱實は、幾冊もの大きなアルバムを、違ひ棚の上から持つて來た。
「貴君の赤ちやんの時、弘一にとても似てゐますね。爭はれないもんだわ。」
と、父子の寫眞を、しみ〳〵と見比べてゐた。
が、日置は、アルバムをのぞき込まうと云ふ氣も起らなかつた。
妻が、その内の一つのアルバムを、開いた時、パラリと一枚小さな寫眞が、卓子の上に落ちた。

妻は、それを拾ひ上げて、一目見ると、サツと頰を赤らめた。
「何だ！」
「……」
「何の寫眞だ？」
「何でもないの。」
「お見せ！」
妻は、娘のやうに、耳迄赤く染めて、その寫眞を良人に渡した。
それは、日置が初めて朱實に會つたとき、彼女が秦と二人ぎりで、崖の上で話してゐるのを撮した寫眞であつた。
秦と朱實は、青春の戀人同志のやうに撮れてゐた。
日置は、無量な思ひで、じつと見つめた。秦の紅顏の姿は、今日の解剖臺上の秦とは、あまりにも違ひすぎてゐる。
朱實も、過ぎ去つた夏の日の夢を思ひ出したのか、默つてゐた。
二人とも、別々の深い沈默であつた。

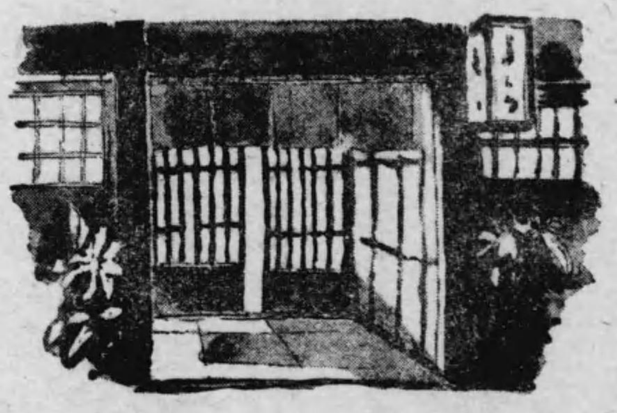
突然、朱實が靜かに云つた。
「秦さん、今何うしていらつしやるかしら！」
「……」
「何日か、お會ひになつたきりなの！」
「うん……」
と、答へたが、鳥渡間を置いてから、
「案外、もう此の世には生きてゐないかも知れないよ。」
と、日置が云つた。
朱實は、それが不服さうに、
「いけませんわ。そんな事おつしやつちや。きつと幸福になつて、どこかにいらつしやるわ……あの方、いゝ方ですもの。」
それを聞くと、日置は今日の解剖臺上の死體について、妻には絶對に話すまいと決心した。
この苦しい十字架は、自分一人で、背負はうと思つた。
解剖室の小使に、遺骨を引き取る手續きを賴んで置いたが、遺骨が手には入つたら、小さく

つても、墓を立てゝやらう。さうすれば、自分の氣持も、いくらか救はれるかも知れないと思つた。

庭樹に積もつた雪が、時々すさまじい音を立てゝ落ちてゐた。

妻が、秦と自分との寫眞を、再び手にとつて見返してゐるのを、日置はだまつて、見詰めてゐた。

兩枝の花



後の窓から、サツと風が入ると快いながら、うつすらと肌寒さを感じるやうな宵だつた。

……隣の座敷にも、客が入つて來たらしい。

（何時です？）（六時、一寸過ぎでせう）（隨分日が永くなつたなア）と、云ふ男同志の會話が鮮やかに、襖を透して聞えて來た。

久美子の前の餉臺には、まぐろの刺身や、野菜の煮たのや、小鮎のフライなどが、箸をつけたかつけないか分らぬほどに、殘されてゐた。

が、彼女は、お新香を、口の中で音のしないやうに嚙みながら、御飯を喰べてゐた。

彼女は何を喰べてゐるのか、物の味が分らぬほど、上つてゐた。

尾張町に近い、大阪料理の店で、窓からは、わけの分らぬ騒音が絶えず、渦を卷いて流れこんで來た。

ひなげしに水ばせうをさした竹の輪ざしに、逢春の床がけのある數寄屋風の三尺床の前に、無作法に若い男が寢ころんでゐた。

森俊三と云ふ新進作家である。

彼は、つい先刻、五月の夕暮の銀座を、一人でブラ〳〵歩いてゐた。珍らしく、知つた顏に

出會はず、晩飯を何うしたものかと考へてゐると、彼がよく出入する雜誌社に働いてゐる立花久美子に會つた。

彼は、久美子が好きだつた。

クリームの地に、紫の濃淡の縞のある着物に、ピンク色の帶をしめて、いつもの癖だが、うつむいて歩いて來た久美子を、彼は新鮮で美しいと思つた。

彼は、何げなく食事に誘つた。

不意の思ひつきだつたが、しかしその位の興味は、よほど前から持つてゐた。

「えゝ。」か「いゝえ。」か、よく分らない返事をしながら、とにかく久美子は、一しよに來た。さし向ひに坐つて、食事を始めたが、別に話もなく、のべつに顏を赤め、會社で見る時より、一層オド〳〵と女らしく、生毛の生えてゐる額際が汗ばんで、ぼーつと櫻色になつて居る。見てゐると、俊三は、小鳥を掌中に摑んでゐるやうに、此方の方が、やるせなくなるやうな氣持だつた。

久美子が、まるで一粒宛、唇に運ぶやうな遲い喰べ方をしてゐる裡に、彼は、サツサと食事を濟ましてしまつて了ひ、少し眠くなつたので、

「失敬！」

と、云ふと、ゴロリと横になつてしまつた。そんな無作法さも、作家である彼には、どく自然であつた。

彼は、その内、久美子の存在を忘れて、いゝ氣持で、ウト〳〵し始めた。

せい〳〵十分か十五分のまどろみだつたが、何か夢らしいものを見始めたとき、

「先生！」

と、女中が來て、食後の菓物を運んで來た。

「やあ、失禮々々。」

と、初て、生々とした聲で云つた。

隨分寢てしまつたのかと、時計を見ると、まだ七時になつてゐなかつた。

勘定をすませて、其處を出ると、何となくまた、銀座通を歩いた。

彼は、痩せてはゐたが、男らしい體格で、手や額際には、纖細な美しい感じがあつた。

が、久美子は、一しよに歩くことが、窮屈でたまらなかつた。

たゞ、作家としての彼を敬慕してゐたので、

「先生、失禮させて頂きます。」

と、云つて別れるきつかけが、なか〳〵見つからなかつた。

「御馳走さまでした。失禮致します。」

さう云つて歸ればいゝと思ひながら、さう云ひ出すべき街角を、一つ一つとり逃してゐた。

その久美子を、ギョッとさせるやうに、

「立花さん、久美子さん。」

と、云ふ華やかな女の聲が呼び止めた。

甘美な聲と、フーッとあたりの空氣が埋められるガーデニヤの甘い香に、森も思はず振返つた。

ダブルクレープの黑いワンピースだが、短いフレーヤアの多いスカートに、明るい紫色のラインがは入つてゐて、踊り子のやうでゐて、浮ついては居ない。巴里の小娘と云つたやうな愛らしい感じのドレスに、小ちやな帽子、愛くるしい華美な顏立を、自分で十分知つてゐる表情なり、身のこなしで、久美子の肩ごしに、早くも森の方にも笑をふくんだ一瞥をよこした。

「誰……貴女のお連……先刻から氣がついてゐたのだけれど、可笑しかつたから。貴女が男の

人と歩いてゐるなんて、あんまり珍しすぎて……森俊三ぢやないの……」
と、小聲で森に聞えないやうに云つた。
「えゝ。」
「紹介してよ。ねえ……」
と、久美子の手を捉へた。
島村綾子と云ふ久美子の、女學校のクラスメイトで、現在は女子美術に行つてゐるお金持の令嬢であつた。
臆病で内氣な久美子の性格と、凡そ正反對な性格が、却つて性が合ふのか、交際下手な久美子のわづかなお友達の一人であつた。
久美子は、相變らずポーツと赧くなりながら、綾子を森に紹介した。
彼は笑ひながら、頭を下げた。
かうも、年若で美しい連が、二人になると、連れ立つて歩いてゐる森も、少しテレくさかつた。
お茶を飲んで、この散歩に、終點を打ちたいと思ひ、S屋の前へ來ると、

「お茶飲みませんか。」
と、誘つた。
「えゝ。」
と、ハツキリ返事をする綾子だつた。
席に着くと、
「私は、ストロベリージュース頂くの。」
と、眞先に云つた。
「立花さんは……」
「あたくし……」
「貴女もさうなさい……」
と、綾子は、久美子の分迄、自分で定めてしまつた。
森も、危くストロベリージュースを、强ひられさうになつたのを、素早くソーダ水にした。
「先生の連載『天使』愛讀してゐましたのよ。お芝居になりましたでせう。お芝居は、つまらなかつたわ。何うして、何でもかでも、お芝居にしてしまふのでせう。小說としてよくつても

いゝお芝居になるとは限つてゐないわ。いゝ脚本がないから、何でもかでもお芝居にしてしまふの？」

と、綾子は、俊三の好評だつた小説の話をした。

俊三は、默つて聞いてゐた。

「先生の『北支一ケ月記』は、あゝ云ふ讀物の中では、一番面白かつたわ。」

と、追ひかけて云つた。

「貴女は遊んでいらつしやるんですか。」

と、森の方で、相手の話をそらさうとして云つた。

「えゝ。女子美術に行つてますけれど、繪は描く氣になれないの。下手で辛くつて……遊んでばかり居ます……」

そんな物云ひをする若い女性に、彼は作家として興味を感じた。

「先生は、何故獨身でいらつしやるの？」

と、いきなり訊いた。

三十二歳の青年作家は、獨身である事でも有名であつた。

森は、その問にフイと顏を赤らめた。

綾子は、忽ち十年の知己の如く振舞ひ、紹介してくれた久美子の事など、忘れてゐた。

久美子は、先刻から云はう〳〵としてゐた言葉が、その時すら〳〵唇を洩れた。

「御馳走樣でした。私遲くなりますから、これで失禮いたします。」

そして立ち上つた。

「あら、久美子さんたら歸るの……」

と、綾子は驚いて、久美子を見た。

久美子は、こんな風に歸る事を、別に不自然とも感じてゐないらしかつた。彼女はたゞ、先刻から云はなくつてはならないと思つてゐた事を、やつと云へた事に、ホッとしてゐる風情であつた。

「えゝ。」

と、云ふと彼女は、

「さよなら。」

と、森に云ふと、歩き出した。

久美子は、森と別れた後も、何時迄も心臓が、コト〳〵と鳴つてゐるやうだつた。

彼女は新橋から、省線に乘つて、池袋の家に歸つた。

小さい商店が、ゴミ〳〵と立ち並んでゐる明るい街が長く續いて、それが盡きて、薄暗い軒燈が、所々に灯つてゐる小住宅街の「產婆」と、赤い軒燈の出てゐる角を曲つた露路内の家だつた。

立花健一郎と門標が出てゐる。これは、彼女の兄の家だつた。

母と兄夫婦と二人の子供、久美子は云はゞ厄介者だつた。

父は、官吏として相當な位置まで行つてゐたが、五六年前、神經衰弱が嵩じて、自殺してしまつた。

久美子は、さうした一家の暗い翳の中で成長した。感じ易い傷み易い、少女の心は、そのために病的に内氣になつてしまつた。

女學校を出ると、働かねばならなかつた。

幸ひにも、新聞の廣告で、應募した「近代日本社」と云ふ雜誌社に採用されたのが、今から三年前であつた。

婦人記者とも事務員ともつかぬ仕事をしてゐたが、餘りに無口で引込思案であるために、その秀れた美貌にも拘らず、人の注意を惹かなかつた。

その中で、「近代日本社」に出入りしてゐる森だけが、よく（立花さん！　立花さん）と、云つて用を賴んだり、話しかけたりした。

だから、彼女も森だけには、親しみを感じてゐたし、森の作品は、どんな短いものでも、探して讀んでゐた、たゞ綾子のやうに、口に出して云はないだけであつた。作品を通じては、森と云ふ人間を、よく摑んでゐた。

彼女は、自分で意識をしてはゐなかつたが、森を愛してゐたのかも知れない。だから、食事に誘はれても、素直に附いて行つたのかも知れない。

しかし、彼女は男の人と食事をしたのは、今日が初めてであつた。

だから、外で食事をして歸つた久美子を、家の人も珍らしがつた。

十時頃、寢床に入つたのだが、戸外で、サラ〳〵と葉鳴がしたので、雨になつたのかと、窓を開けて見ると、空は晴れて、星が出てゐた。

寢つかれなかつた。無理に、眼をつむると、次第に、頭の中が明るくなつて、大きな眼をし

つかり閉ぢた上品な、高い鼻の森の寢顔が浮び上り、それを打ち消さうと、綾子の姿を思ひ浮べると、何故か胸が苦しくなり、

「先生は、何故結婚なさらないの。」

と云ふ綾子の大膽な華かな聲が、戸外の葉鳴に交つて聞えるやうな氣がして、頰が熱くなつて來た。

久美子が、あまり唐突に歸つてしまつたので、森と綾子とは、急にバツが悪い思ひを同時に感じ、顏を見合はせると、笑つてしまつた。

「何うしたんでせう？」

と、森が云つた。

「内氣なおとなしい人ですから……」

「貴女とは、長いお友達なんですか……」

「えゝ。女學校の一年から……」

「ぢや、よく知つてますね。」

「えゝ。それはもう。いぢらしいほど、おとなしい方。よく雜誌社なんかに、勸めて居られると思ふ位。」

「ふむ……」

「家庭的にも、あの方あまり惠まれていらつしやらないの。」

「さうお……」

綾子は、搔いつまんで、久美子の家庭や、性格について語つた。

森は、その話を聞くと、不憫ないぢらしいものを、心一杯に感じた。そして、彼女を新しく見訂した。

綾子とS屋を出て、街角で別れる時、綾子が、

「また、お目にかゝれます？」

と訊ねた。

「えゝ。どうぞ……。鎌倉に住んでゐますが、一週間に三日位は、夕方、近代日本社にゐます。お電話下さい。用がなければ遊びますよ。立花さんも一しよに……」

と、森は云つた。

森が、何時迄も結婚しないのは、昔、女優と同棲して、女にこりてゐるからだつた。
ある蓮葉な女優が、彼の文名がやゝ認められかけた時、彼を追ひかけ廻し、彼を摑へて、心身共に疲れさせると、彼のもとを逃げ出してしまつた。
彼は、さう云ふ男性の氣持を疲れさせる女にこりた。男と愛慾的闘爭などをしないで、家庭を守り、身の廻りの世話をしてくれる溫和な女性がほしかつた。
久美子は、まるで淨瑠璃の中に出て來る女性のやうに、かれの眼に映つた。
が、それ以上、別に關心を持つてゐなかつたが、今日の容子を見たり、彼女の家庭の事情などを聞くと、あるいぢらしさを感ずると共に、彼女は自分を愛して居やしないかと云ふ、あたたかい感情が、彼の鋭い作家らしい推理の上に、浮び上つて來るのであつた。
その日から、一週間ばかり經つたある日の午後、「近代日本社」に立ち寄つて話してゐると、
「森さん、お電話。」
と、交換手が呼んだ。
「私、島村ですの。お忘れになりまして？　久美子さんに紹介して頂いた……」
電話で聞くと、一層甘い聲だつた。

「分ります。先日は、失禮ー」
「今日、お暇ですの……」
「えゝ。」
「ぢやア、お誘ひしてもいゝのね。六時に、モナミでお待ちしますわ。久美子さんも誘つて置きます。」
「はあ……」
もう電話は、切れてゐた。
彼は、一寸あたりに、氣拙いものを感じた。久美子が、此の社に働いてゐる丈に、外で待ち合はせたりすることが、妙に後めたい氣がするからであつた。
五時頃、彼はブラリと「近代日本社」を出た。
トイレットの前で、久美子とすれ違つたが、彼女は表情を變へず、頭を下げた丈で、彼の脇を通つて行つた。
銀座で、一寸買ひ物などをして、六時になるのを待ち、モナミに寄つて見ると、ボックスに綾子が一人ゐて、彼を見ると微笑しながら、

「久美子さん、今迄居たんですけれど……」
と、云つた最初の言葉が、彼をまごつかせた。
「先生も來ると云つたら、何うしても歸ると云つて、きかないんですもの。驚いたわ。」
森も驚いた。
その夜、森は綾子とダニエル・ダリュウの映畫を見てから、一寸酒場へ寄りたくなつたので、綾子と別れようとすると、綾子は、私も一しよに付いて行くと云つた。
繪をかく丈に、普通の令孃とは違ふのだらう。森は、來るなとも云へず、行きつけの酒場の扉を押して、二人でスタンドの前に坐つた。
綾子も、ビールを注文し、口紅の赤い唇に、泡をつけた。
「島村さんは、どんな人を旦那さまにする？」
と、森が訊いた。
綾子は、氣位は高かつたが、高慢ではない。華やかではあつたが、騒がしくはなかつた。あく抜けがしてゐて、話してゐると樂しかつた。お友達にはなれる女性だつた。
「あたし、あたしは、男を大體三つに別けてゐるの。第一は、自己の希望に邁進して、家庭や

係累に、あまりかまはない人、政治家や藝術家に多いわ。第二は、學問も才能もあまりないが、コツ〳〵働いて、妻子を大事にする人。第三は、その間の中ブラリンの人。これが一番多いでせう……現代に。……私は、第二の人と結婚したいの……」
「ほゝう。それで、辛抱出來る？」
「結婚生活とか社會生活とかについて、教へられると、第二のコツ〳〵派が、よくなつて來るんぢやないかしら、……それに、私藝術家は嫌ひよ……」
「なぜ？」
「藝術家つて、とても神經を使ふでせう。私も、神經を使ふ性質なの、だから、お互に神經を使つてゐると、すぐくたぶれると思ふの……」
「へえ、大した見識だねえ。」
「何が……厭だわ。あたし、眞面目よ。」
「貴女が、主義通り、實行するか見て居ませう。」
「忘れずにね、ほゝゝゝゝ。」
と、綾子は、ホンノリ醉つた眼元で、愉しげに笑つた。

「先生は、どんな人奥さんにするかしら、やつぱり家庭的な婦人でせう。」
「まあ、さうだねえ。」
森は、昔の同棲生活の失敗を考へ出しながら云つた。
「さう。ぢや、久美子さんなんか、どう。久美子さんのやうな可憐な人お嫌ひ？」
「嫌ひぢやありませんよ。」
と、ハツキリ云つて森は、ビールをグツと飲みほした。
そして、ニコ〳〵微笑して聞いてゐる綾子の顏に、
「しかし。あの人は、僕のやうな職業の男を認めんでせう。」
と、凡そ彼らしくもなく、相手の裏書を求めるために、裏腹な事を云つた。
「先生は、小説家のくせに、久美子さんの氣持が、お分りにならないの？　あの方は、とても先生を好きなのよ。此間と云ひ、今日と云ひ、久美子さんの行動は、內氣の嫉妬よ。」
「嫉妬？」
「えゝ。久美子さんと私とは、凡そ正反對な性格でせう。だから、久美子さんは、何にも云へないのよ。その反對に、私がどん〳〵先生と話しが出來、お友達になつてしまふのを、久美子

さん、目のあたり見てゐるのが、辛いのよ。久美子さんは、お濠端でもトボ〳〵歩きながら、センチになつてゐるのぢやないかしら……」
と、綾子は美しく笑つた。
森は、この頭のいゝ小娘を、びつくりして見訂した。
綾子と云ふ女性の出現で、思ひがけなく、久美子の內心を見透してしまつたやうで、森は「近代日本社」で、久美子を見ると、以前のやうに、さりげない氣持で居られなかつた。
久美子に、平氣に用事など賴めなくなつた。
そのくせ、久美子の存在がとても氣になつた。
久美子の方でも、變に森の視線を避けて、今日は休みかしらと思はせるほど、森に姿を見せない日があつたり、また姿を見せる日は、後姿で一杯に思を云つてるやうな氣がすることもあつた。
綾子は、その後二三度、彼を呼び出して彼と遊んだ。一度は、お友達の畫學生を連れて居たりした。

五月の末頃、森と會つたとき、綾子はあまり暑くならない前に、一度久美子さんも誘つて、ピクニツクに行かうと云つた。

でも、所を定めて行つたのでは面白くないから、何か食料を用意して、東武電車なり、西武電車なりに、乘つて氣の向いた郊外で、降りて歩かうと云つた。森も贊成した。そして、六月の第一日曜に行くことに定めた。

久美子は、綾子からの手紙を貰つた。

（今度の日曜日に、森さんを誘つて、ピクニツクに行くから、東武電車の淺草松屋の入口で、九時に待ち合はせてくれ）と云ふ文句であつた。

久美子は、何となく苦しい感じがした。

綾子は、好きであつた。が、綾子が不意に出て來て、自分が心の中で、そつとしまつて置いた森と云ふ人を勝手に引きずり廻してゐるのが、嫌だつた。綾子と會ふことも、綾子と森と自分との三人になることも嫌だつた。

勿論、久美子は、森と綾子とが戀愛關係になつたとて、それに抗議しようとか、自分も競爭

しようなど云ふ氣はなく、たゞ森のことを考へないやうにあきらめるだけであつたが、たゞ森と綾子とが、だん〳〵親しくなるのを、マザ〳〵と見てゐることは、嫌だつた。

だから、綾子の手紙を見ても、（他に用事があるから行かれない）と、斷りの手紙をかいた。

すると、その手紙と行き違ひに、綾子から速達が來た。

久美子様。

昨日出した手紙だけでは、貴女が來てくれさうもないので、心もとないので、重ねて書きました。

是非、いらつしやい。どんな用事があつても……。私は、貴女に、とても、爲になる忠告がしたいの。あんまり弱氣ではいけません。强氣になる時は、强氣にならないと、一生の運を取りにがします。明日は、きつと〳〵いゝことがあるでせう。ぜひ〳〵。私、貴女を羨しいと思つてるのよ。

綾子

と書いてあつた。

綾子が、なぜ強要するのか、何が羨しいのか分らなかつた。が、それほど、強要されると、斷り切れない久美子だつた。久美子は、（行きます）と、素直に返事した。

日曜日の朝が來た。

夏祭の太鼓の音が早くから聞えてゐた。

久美子は、初て單衣を着て、黄色い帶をしめ、新しい草履を穿いた。

心は、オド〳〵と、物事をちつと考へられないやうな氣持で、滅多に行つたことのない淺草へ、電車や地下鐵で、一時間近く搖られながら行つた。

もう、九時十分過ぎたのに、約束の場所には、綾子らしい姿はなかつた。

ぼんやり人のは入つて來るのを見てゐると、鼠色の間服を着て、輕快なソフトを被ぶつた森が、グン〳〵此方へ來るので、久美子は、反射的に顏をそむけたが、そのまゝ動けなかつた。

森は、久美子を見つけると、

「やあ、今日は……今日は綾子さんは來ないよ。」

と、いきなり云つた。

「今朝、早くこんな速達をよこした。」

さう云つて、久美子に手紙を見せた。

（急な用事が出來、お約束を守れません。久美子さんが、一人で待つて居ますから、ぜひいらしつて下さい。そして、お二人で樂しいピクニツクをなすつて下さい。）

久美子は、見る〳〵顏が眞赤になつた。

森も、さすがに、日頃の落着を失くしてゐるやうであつた。

「君が、一人で待つてゐると思つて、顏も洗はないで來ましたよ。」

「……」

「ねえ、君……」

親しく呼ばれたのが、久美子の立ちさわぐ氣持を、いくらか落ちつけた。

「綾子さんの計畫に依つて、ピクニツクに行きますか。……それとも嫌？」

と、森は、久美子に訊いた。

「いゝえ。嫌ぢやございません。」

久美子は綾子の忠告通り、強氣を出した。

日曜の電車は、すしづめであつた。

が窓から、五月の風がさわやかに、久美子の熱い頰を吹いて行つた。

「綾子さんと云ふ人は、いゝ人だね。僕の氣持も、君の氣持も、よく察してゐるんだね。」

と、森が云つた。

「えゝ。」

と、久美子は、涙ぐましい氣持になつた。

「君は、僕と結婚してもいゝの？」

森は、作家らしい無雜作で云つた。

久美子は、又强氣を出して、深く肯づいた。

一

去年九月の初、まだ上海戰線に、彼我の激しい銃火が交へられてゐた頃だつた。暑さのきびしい日曜の午後、省線目白驛で降りた二人の青年があつた。

一人は、アルパカの黑の背廣を着た長身、丁度佐野周二の色を黑くしたやうな美青年で、他の一人は白い麻の背廣を着て背も中背であるが、篤實らしいやゝ四角ばつた顏をしてゐた。

「圓タクで行かうか。」

改札口で切符を渡しながら、黑い背廣の男が云つた。

「バスがあると云つたが、バスぢや降りてから、大變だらう。圓タクに五十錢やつて、近くまで乘つた方がいゝねえ。」

白麻の男は、さう云つて來かゝつた「空車」を呼び止めた。

「ねえ。雜司ヶ谷の墓地の附近だが、よく家を探してくれ。その代り、五十錢やる。雜司ヶ谷一丁目の三〇九番地なんだ。」

背の低い方が、圓タクに交渉して、二人は自動車に乘つた。

車は、コンクリートの改正道路を暫く走しつて、陸橋にさしかゝる手前で左に折れると、その陸橋の下を通つてゐる明治道路に出て、二三町ばかり走しり、右へ墓地の方へ折れた。

「君は中學を出て以來、松村先生に會はなかつた？」

長身の方が友達に訊いた。

「一度會つた、ホラT中學が、甲子園で、準決勝戰まで行つた時、神宮大會にも出場しただらう。あの時、先生が附添で來て居られた。」

「さう。僕は、卒業以來だよ。だから、一昨日先生が、神保町の交叉點に立つて居られるのを見ると、つい懷しくなつて……電車を降りたんだ……」

「今日行くこと知つてゐる？……」

「うん。この日曜か、でなかつたら、次ぎの日曜は必ず行くと云つたのだ……」

二人は、中學時代からの親友であり、恩師の松村先生が鄕里の中學を廢めて、上京してゐるのを知つて、訪問して行く途中であつた。

雜司ヶ谷墓地の森らしい樹立が、左手に見え始めた。

「ねえ。君、三〇九番地つて、どの邊りか、一寸訊いてくれないか。」

長身の青年は、運轉手に云つた。
「はあ……」
運轉手は、車を止めて、直ぐそこの酒屋には入つて行つたが、直ぐ引き返して來て、
「そこの坂を昇つて一町ばかり行つたところださうですよ。」
と云つた。
「車は、は入らないの？」
「は入らないさうですよ。」
「ちや、仕方がない。降りよう。」
二人は賃錢を拂ふと、そこから、四五間歩いて、左へ坂道を上つて行つた。
「先生の家族は……」
背の低い方が訊いた。
「何も訊かなかつた。何しろ、先生も乘換へるところだし、僕も會社へ行く中途だらう、五六分立話して別れたんだ……」
「お子さんが、二三人あつたねえ。」

「うん。電信柱に昇つたりするいたづらつ兒が一人ゐたね。」
「まゝゐた〳〵。」
人とも中學時代の懷しい思出が、ちらと浮んだ。
坂を上り切つてからしばらく歩くと、道が幾筋にも別れてゐたが、二人は軒毎の番地を讀みながら、三〇九番地に近い方へ歩いて行つた。
丁度向ふから、郵便配達夫が來たので、松村と云つて訊くと直ぐ分つた。突き當つて、右に折れた生垣をめぐらした平家建の家であつた。
門には、松村寓としてあつた。先生の生活が、あまりに慘めでないことを二人は祈りながら門を開けた。
家は五六間位しかない容子だが、庭は割合に廣く、玄關の容子なども、取りみだした所はなかつた。
格子を開けると、二人の來訪を待ち兼ねてゐたやうに、松村先生が奥から、現はれて來た。
「やあ。よく來てくれたねえ。さあ、上り給へ！　汚いところだが……」
と、云ひながら、二人を廊下づたひに座敷の方へ通した。

學校時代に、鶴と仇名せられた丈、スラリと背の高い白髪の清軀が、いよ〳〵上品に見えて二人にはなつかしかつた。

「先生、しばらくでした。」

背の低い青年は、丁寧に頭を下げた。

「やあ、遠藤君とは、神宮大會の時に會つたねえ。あの時は、まだ學生だつたねえ。」

「はあ。」

「今何處にゐる？」

「日本電機株式會社に居ります。」

「君は、早稲田の理工科だつたね。」

「はあ。さうです。」

「山形君と、一昨日偶然に會つてね、君と一しよに、訪ねて呉れると云ふので、朝から待つてゐたんだよ。」

顏には、心からなる微笑が浮んだ。

學校時代から、生徒には寛大で、それでゐて、馬鹿にされぬ丈の人徳があつたので、學校中

で人望第一であつた。たゞ、正規の學校を出てゐず、檢定試驗を通つた人であつた丈に、教頭にも校長にもなれずに終つたらしい。

「一昨日は、失禮しました。まさかと思つたのですが、何う見ても先生に間違ひないので電車から降りたのです。」

山形と云はれた長身の青年が云つた。

「あゝさう？わしも、君が變つてゐるのでびつくりした。今年の四月に上京したんだよ。T中學に、丁度十七年お世話になつたよ。年が年だし、お暇を貰ふことにしたよ。」

「ぢや、東京では何にもしていらつしやらないんですか。」

と、遠藤が訊いた。

「いや、わしの舊友が、武藏野學院をやつてゐる今村と云ふ男で、小づかひかせぎに來ないかと云ふもんだから、一週間に二日丈行つてゐるよ。」

「それは、結構ですな。」

二人とも舊師のために、喜んだ。

「先生にお世話になつた連中が、東京に五六十人はゐるやうですから、先生のために一夕集り

たいと思ひますが……」
「いやありがたう！　この間も、君達より二年上の大野浩三に逢つたら、そんな事を云つてくれた……」
と、老先生はニコ／＼笑ひながら云つた。
「大野浩三、あゝ内務省にゐる大野君ですか、ぢや僕達から、大野君と打ち合はせをします。」
と、山形が云つた。
丁度、その時奥の襖が開いて、先生の令嬢らしい二十一二の娘が、お茶を運んで來た。
「いらつしやいまし！」
しとやかに手をついた。
「これが、僕の娘だ……此方が山形君、此方が遠藤君。」
紹介されて、二人とも丁寧に頭を下げた。そして、頭を上げて、娘の顏を見たとき、二人とも心の中で（アッ！）と、叫び聲を發したい衝動を受けた。
娘があまり美しかつたからである。
先生に似て長身で、色が白く鼻筋が通つてゐるが、その眸が何か寶石が持つやうな得ならぬ

魅力を持つて輝いてゐた。
娘が去つた後で遠藤が訊いた。
「坊ちやんは、何うなさいました？」
「あれは、水戸の高校へ行つてゐる。」
「その次ぎが、今のお嬢さんですか。」
「うん。もう二十一で、そろ／＼嫁入口を探さねばならんのだが……」
と、先生は事もなげに云つた。
「はあ。さうですか……」
遠藤と山形は、口を揃へて云つた。
二人とも獨身であつた。山形は戀人があつたが、胸が惡く、今年の春死んでしまつたし、遠藤は郷里から幾度も、緣談を云つて來てゐたが、自分が目で見ない娘との緣談を進展させる氣持がなかつたので、大抵は返事を出さなかつた。
夕方まで、學校時代の思出話が、いろ／＼續いた。歸らうとすると、
「何もないが……」

と、引き止められて、近所から取つたらしい鰻どんぶりとビールとの御馳走になつた。
女中は、使つてゐないらしく、先刻の令嬢が給仕をして、ビールのお酌をしてくれた。二人とも、それで陶然となつてしまつた。
禮子と云ふ名前であることが分つた。
先生の夫人も健在であるとの事だつたが、挨拶には出て來なかつた。
夏の長い日が暮れてから、二人は先生の家を辭した。
最初上つて來た坂道を降りかけた時、山形が待ちきれないやうに云つた。
「シヤンだね。あのお嬢さん。」
「うん！」
と、遠藤も、それに應じたが、二人ともそれ以上は、何にも云はなかつた。
二人とも、自分が令嬢のことを喋べつて、相手が令嬢に對して、より以上に、關心を持つことを怖れたからであつた。
だから、二人ともだまつて、自分の胸の中で、令嬢に對する空想に耽つたり、計畫を考へたりしてゐた。

二

松村先生が、昔の教へ子達の訪問を受けて四五日して、その教へ子の一人である山形文男から、一通の速達を受け取つた。

拜啓
先日は　久しぶりに御面晤の榮を得、誠に感激しました。先生が昔通りお元氣で、快活であられる事は、何よりの悦びでした。先生が東京に居られるのを幸ひ、今後とも時々お訪ねしようと、遠藤とも話し合ひました。
所が、僕は突然、先生にお願ひしなければならない事が出來たのです。それは、お嬢樣に就いてです。舊師弟の間として、僕は卒直におねがひします。先生の御口吻に依れば、お嬢樣はまだ定められた御緣談がないやうですが、もしさうでしたら、ぜひ僕が頂きたいのです。
僕の人物に就いては、先生も御存じの通です。僕は中學時代以來、そんなに墮落してゐるとは思ひません。昔の僕を信じて下さるとしたならば、今の僕も信じて頂きたいのです。鄉里

の方は、先生のお嬢様を頂くと云ふことになれば、問題なく賛成して來ると思ひます。僕の只今のサラリイは、百二十圓ですが、相當の前途を持つてゐると、自信して居ります。もし、お嬢様を僕にお許し下さるやうでしたら、將來決して疎略にはしない決心であります。

尤も、かうした問題は、御本人の御意志に依ることですから、もし御本人に、その意志がお在りにならない場合は、御遠慮なくお斷り下さい。もし、又僕と當分交際つてからと、おつしやるのでしたら、悦んで御交際いたします。

今度の日曜日の午後參上致しますから、その時お返事下さらば、大變ありがたいと思ひます。

山形文男

松村先生

侍史

松村先生は、その手紙を讀んで、可なり悦んだ。長男が家にゐない寂しい家庭では、娘がゐ

ることは、慰めにもなるし、家事の助けにもなつた。しかし、もう二十一になつた今は、親自身の爲を計つて、婚期を逸してはならぬと思つてゐた。だが、東京に出て來て以來は、親類知己などもあまりないので、娘の緣談を運びたいにも、殆んどキッカケがないのであつた。その事が絶えず、松村先生には氣になつてゐた。だから、二人の敎へ子との會話でも、娘の緣談について、一言口をすべらしたのであつた。

學校時代は、遠藤の方が、ずーつと成績が上であつたが、しかし山形の方も素直で、快活な中學生であつた。

（山形なら、やつてもいゝ。風采は立派だし、娘も異存はないだらう。）

と、先生は考へた。

その日、午後娘の禮子がお裁縫の稽古に行つた留守、松村先生はその手紙を夫人に見せた。夫人の方は、良人よりも娘の緣談を氣にしてゐた丈、手紙を半分ばかり讀んだ時に、小さい凋びた顏に、もう喜色が溢れてゐた。讀み了ると、良人に云つた。

「結構ですわ。山形さんて、品行はどうでせうか。」

と、訊いた。

「素直な奴だよ。此間、神保町で、十年目にヒョクリ逢つたのだが、涙を浮べてなつかしがつてくれたよ。」

「そんな方なら、安心ですわねえ。」

「しかし、好男子だからねえ。女の方で、やい〳〵騒ぐかも知れないが……」

「でも、禮子に、これほどまで云つて下さるんですもの。……禮子に話して見ませうか。」

夫人は、すつかり乘氣になつた。

が、松村先生は、思慮深く、

「まあ！　待て、日曜に來ると云ふから、會つて先方の氣持をよく聽いてから、禮子に話すことにしよう。それで遲くはないではないか。」

と、云つた。

「はあ、それで結構でございます。」

素直な、良人に何一つ逆はない夫人は、さう云つてうなづいた。

松村夫妻は、この緣談に、急に元氣づいて、二日後の日曜の來るのが、しきりに待たれた。

すると金曜日の晩であつた。思ひがけなく、この間一しよに來た遠藤圭三からの速達が、松

村先生に配達された。

（また緣談か？）

と、先生は、びつくりして封を開いたが、それは緣談ではなく、中から東京劇場の切符が二枚出て來た。手紙の文句は、次ぎのやうだつた。

拜啓

先日は、久しぶりでお目にかゝり、大變愉快でした。その上、夕食の御饗應になり厚くお禮申します。そのお禮と云ふわけではありませんが、封入の切符お送り致します。明日の切符で少し早急ですが、奥さまにお嬢さまと來て頂ければ、大變ありがたいと思ひます。

遠藤圭三

松村先生

「ほゝうー」

と、松村先生は、驚いて横にゐた夫人の方へ、手紙と切符を見せた。

「芝居の切符を下さつたのですか。」

と云ひながら、夫人は手紙を讀んだが、

「この高い切符を……五圓二十錢ですわねえ。……ねえ、禮子、この間いらしつた遠藤さんが東劇の切符を下さいましたよ……」

と、勝手元に働いてゐる娘に呼びかけた。

「遠藤さんて、あの低の背い方の方！」

と、禮子は、ぬれた手を割烹着で拭きながら、母の傍へ來て坐つたが、切符をとり上げて見ながら、

「明日の切符ねえ。うれしいわ、お父様行つてもいゝのでせう……」

と、父に云つた。

「うん。折角だから行つておいで！」

と、松村先生は云つた。

「東京へ來て初てね。東劇はたしか、左團次だわ。新聞見ると分るわ……」

禮子は、いそ〳〵と立つて、棚の上に上げてある今日の朝刊をおろした。

「昔教へた生徒さんなんて、いゝものですわねえ。おかげで、芝居が見られる！」

夫人も、嬉しさうであつた。

三

慎しい家庭であつたから、東京の大劇場を見物に行くなどは、禮子母子にとつては、思ひがけない興奮であつた。

禮子は、行きつけない近所の髪結さんに行つて、島田に結つて貰つた。

外出着の明石の單衣を着た。田舍で買つたもので柄は少し古かつたが、彼女の秀れた容姿はどんな着物をでも、美しく見せた。

普段乘り馴れないタクシに乘つて、劇場へかけつけたのは、開幕の五分前であつた。

座席に着かうとすると、もう遠藤が前から來て、立つて母子を迎へてくれた。

母は、くど〳〵しい初對面の挨拶をした。

が、禮子には、

「よく來て下さいましたねえ。突然なので、來て下さるか、どうか心配してゐました……」

と、親しげに云つた丈だつた。

禮子は、だまつて好意のある微笑で、お辭儀をした丈だつた。

芝居が間もなく始まつた。禮子が、眞中に腰かけてゐたが、遠藤は禮子を隔てゝ坐つてゐる母に、何くれと説明してくれた。出て來る役に扮してゐる役者の名前とか、役柄とか芝居の筋とかを、老人に分り易く話してくれた。

二幕目が終つた時、食堂へ案内されたが、遠藤は母夫人の手を取らんばかりに劬つてくれた。

素直で、人のよい母夫人は、すつかり遠藤が氣に入つたらしかつた。

丁度中幕の狂言が終つた時だつた。休憩室へは入つて、ソフアに腰をかけてゐたが、遠藤は、

「賣店へいらつしやいませんか、何かお土産を買ひませう。」

と云つた。禮子は、すぐ立ち上つた。母夫人は、生れて初めてと云つてもよいほどの刺激で、少し疲勞してゐたと見え、

「私は、玆で休んでゐたいから……」

と、云つた。

禮子は、初て遠藤と二人ぎりで賣店へ行つた。

若い男性と、二人ぎりになるなど、禮子にとつては、初てであつた。禮子は、生れて初て、娘らしい心のときめきを覺えた。

「ロクなお土産もないでせうが、お菓子でも買ひませう。先生は、甘いものは、如何です。」

と、遠藤が訊いた。

「嫌ひぢやございません。お茶受に、いつも甘いものをほしがるのです。」

「さうですか……」

遠藤は、うすみどりと紅とに色別した美しいお菓子を二折ばかり買つてくれた。

「ありがたうございます。お芝居を見せて頂いた上に、お土産まで買つて頂いて……」

「いゝえ。僕こそ、たいへん愉快です。先生のお嬢さんに、あなたのやうな方が、いらつしやるとは、夢にも思ひませんでした……」

普通の言葉であつたが、それを喋べつてゐる遠藤の眼は、青年らしい情熱で、光つてゐた。

「それは、何う云ふ意味でせうか……」

禮子も、何となく氣持が彈んでゐたので、氣兼なく話すことが出來た。

「さう開き直つて、訊かれると困りますが、貴女のやうな理想的な、……美しい方が、いらつしやるとは思ひませんでした。……尤も、先生も上品な立派な方ですけれど……」

「まあ！」

禮子は、よわ〳〵とした上體を、波打たせながら、耻しげに笑つた。

「いや、僕はほんたうに、驚きました。東京に、十年近く居りますが、貴女のやうな女性として完璧に近い方を見たのは、初めてです……僕は……」

と、云ひかけたが、もうその時は、休憩室の入口へ來てゐたので、

「僕は、一度ゆつくり、僕の氣持を聽いて頂きたいのです……僕に……」

と云つたが、其處はあまりに周圍に人が多すぎたので、遠藤は、口をつぐんでしまつた。

が、禮子には、それが遠藤の自分に對する求愛であり、求婚であることが、おぼろげながら感じられた。

四

その翌日、日曜日の午後一時頃に、山形が松村先生を訪問した。禮子が、取次ぎに出たが、

山形は堅くなつて、挨拶した。

禮子が山形を座敷に通し、お茶を運んで臺所へ引き返さうとしてゐると玄關で、

「速達！」

と云ふ聲がした。

走しり出て、受け取つて見ると、それは昨夜芝居に招待してくれた遠藤から、禮子宛の手紙であつた。

昨夜、廊下で意味ありげな言葉を聽いてゐる丈に、禮子の胸は、さわいだ。開封するのが恐しいやうな樂しいやうな氣がして、持つてゐる手がかすかにふるへた。

手紙を讀むところなど、母に見られたくないやうな氣がして、臺所口から裏庭に出ると、そこにある物置小屋に、用ありげには入りながら、封を切つた。

拜啓

昨夜、突然觀劇にお誘ひいたしまして、却つて失禮だと思つてゐましたのに、快く御見物下され、感謝の至りです。私の最も尊敬する舊師に、貴女のやうな、氣高いお嬢樣がいらつし

やることは、私にとつては、一つの驚異でした。松村先生のお言葉の中に、貴女がまだ定まつた御縁談のないのを知つて、僕は終夜眠られませんでした。

私は、お目にかゝつて以來貴女のことを思ひつゞけてゐたのです。私のやうなものでよかつたら、貴女に私と結婚して下さる事をお願ひしたいのです。

これは、先づ先生に、お願ひすべきか、貴女にお願ひすべきかと私は迷ひました。しかし、私の考として、先づ御當人である貴女に、お願ひするのが、本當ではないかと思つたのです。

私は、故郷に百石ばかりの資產があります。月收はボーナスを加算すれば、二百圓位にはなります。物質的には、非常な災難に會はない限、貴女に御不自由をかけることはないと思ひます。

私は、身體はごく健康です。酒は、交際上必要な場合の外は飲みません。品行の點では、自分で申し上げるのは、をかしいですが、花柳の巷に出入したことは一度もありません。戀愛したこともありません。この點は、充心安心して下さつてもいゝと思ひます。

係累は、國許に母と今年十七の妹が居るばかりで、母に上京せよと度々申しましても、決し

て參りません。母は、僕が結婚すると申せば、欣んで承諾すると思ひます。

貴女の御內諾があれば、適當な仲人を介して、先生にお願ひするつもりです。

貴女が、もつと私の人間を知りたいとおつしやるのでしたら、お目にかゝつて何事でも申し上げるつもりです。

あまりに突然でございますが、御熟考下さらば、ありがたく思ひます。

遠藤圭三

松村禮子様

讀み了つて、禮子には、俄かに盛んな春が訪れて來たやうな氣がした。この前の日曜に、父の昔の教へ子が二人連で來たとき、禮子はどちらも賴もしい青年だと思つた。父を、訪ねて呉れる志が、彼女にさう思はせたのかも知れなかつた。

山形の方は、キレイな人だと思つた。しかし、浮ついた所の少しもない禮子は、容貌などについては、何も考へなかつた。遠藤の方は、風采こそ劣るが、それ丈にどこか力强い所がある

やうにさへ考へられた。

昨夜の招待も、禮子は樂しかつた。廊下で、何か云ひ出さうとした容子にも、場所柄こそ不適當だと思つたが、しかしそれ丈に却つて眞劍さが感じられ、禮子は心ををどらさずには居られなかつたのだ。それが、今手紙で、ハツキリと求婚して下さる！　それは、娘として嬉しい事だつた。

たゞ、すぐ返事を出すことなどは、彼女としては、とても耻しいことだつた。やはり、正式に仲人を通して、兩親に申し込んで貰ひたいやうな氣がした。

讀み了つた手紙を、帶の間にしつかりしまつてから、臺所へ歸つたが、禮子は何だか耻しい氣がして、茶の間には入つて、母と顏を合はすのさへ避けたかつた。

山形は、父と一時間ばかり話をして歸つて行つた。用談らしく父も山形も聲が低くかつた。

歸る時、禮子も玄關迄送つて出た。

山形を送り出すと、父は傍に立つてゐた禮子に、

「一寸話があるんだが……」

と、云つた。父の改まつた容子に、禮子はハツと思つた。

「此方へおいで……」

父は、禮子を座敷へ誘つた。

禮子が緊張して坐ると、

「實はお前の緣談の話だが、今山形君が來てね……」

と云つて、父は、一寸云ひよどんだ。禮子は、遠藤が自分の返事を待ち切れなくつて、友人の山形を仲人として、よこしたのではないかと思つた。

「いや、今日始まつた話ぢやないんだが、此の間山形が來ただらう。あれから二三日目に、手紙をよこしたんだ……お前をお嫁に呉れないかと云つてねえ……」

「え！」

禮子は、低かつたが、思はず驚きの叫びをもらした。

「何うして、びつくりするんだ……」

「いゝえ……」

と、禮子は、打ち消したが、禮子の顏は耳迄赤くなつてゐた。

「何も驚くことはないぢやないか。お前も年頃の娘だし……それに、この間山形に、お前の嫁入口も探さなければならぬと、ついロをすべらしたのでね……」

禮子はうつむいたまゝ、だまつてゐた。

「お前を、一目見た丈で、すぐお嫁に呉れと云ふのは、少し急なので、今日來ると云ふから、それまで返事をしなかつたんだ。今日會つて、よく先方の氣持を聽いて見たが、決して不眞面目なものではない。昔三年間も教へた丈に、性質もよく分つてゐる。少し美男すぎるが、誠實な奴なんだ。不眞面目な男なら、折角の日曜などに、舊師などを訪ねては來やせん。だから、人格の點では、先づ安心だと思ふ。身體が、少し弱いやうだが、あの位は仕方がないと思ふ。月收は、百二十圓で、ボーナスなどはあまりないらしいが、出世の見込はあると思ふ。第一昔馴染だから、その點が安心だと思ふ。どうだ、山形に對する印象はどんなものだ。」

父は、娘を强制しようなどと云ふ氣持は少しもないらしく、娘から自然な氣持を聽かうとしてゐるらしい。

が、禮子は答へられなかつた。これが、遠藤との話であつたら、彼女は恥しがりながらも、卽座に答へられたかも知れない。が、山形に對しては、彼女の心の準備は、少しも出來てゐないのだ。

彼女は、むろん山形を嫌つてゐるわけではない。山形との緣談が、單獨に父から話されたの

であつたら、彼女は素直に、心を動かしてゐたであらう。

たゞ、昨夜遠藤自身の口から、彼の心の奥の情熱を感じてゐたし、それに先刻の手紙である。そんな烈しい刺激が、つゞけざまに、彼女の胸を衝いたのであるから、二十一の彼女には突嗟の間に、返事の仕様がなかつたのである。

「……」

禮子は赤くなつてうつむいたまゝであつた。

「山形のやうな男は、嫌ひか？」

「……」

「嫌ひなのか？一生の大事だから、遠慮することはない。ハッキリ考へなさい。」

「……」

禮子は、同時に二人の青年から、想はれると云ふ嬉しいやうな、悲しいやうな興奮で、胸がふるへて來るばかりであつた。

「嫌ひか……」

「いゝえ。でも……」

と、口ごもつてしまつた。
「まだ結婚するのは早いと思ふのか？」
禮子は、かすかに首を振つた。
「結婚はしてもいゝのか。」
「……」
「どちらだ、ハツキリ云つてくれんか……」
禮子は、當惑して涙ぐんでしまつた。
「何が悲しいのか……」
「……」
「こんな事は、大事な事だ。無理はしたくない。だから、お前の氣持を、ハツキリ云つてくれ……」
禮子は、それでしばらくだまつてゐたが、遠藤のことも、自分一人の胸に收めて置くよりも父に云つた方がよいと思ひ、思ひ切つて、
「お父様、遠藤さんからも同じ事を云つて來てゐるんですの……」

と、禮子は涙聲で訴へるやうに云ゆた。
「遠藤から……」
父は愕然としながら、
「何時……」
「先刻、お手紙が參りましたの。」
「どら、お見せ……」
「はい。」
禮子は、懷ふかくかくしてゐた遠藤からの手紙を父に見せた。
父は、娘に直接手紙を出すなど、怪しからん！　と思つたが、讀んでゐる裡に、遠藤のやり方も、決して非難すべきではなく、これはこれで、ちやんと筋道の通つた、正しい方法だと認めずにはゐられなかつた。
「うゝむ……困つたなア。遠藤も、なか〳〵いゝ奴だからなア。眞面目で、しつかりした男だよ。どちらにでも、わしはお前をやりたいんだが、二人一しよぢや困つたなア……」
父は、苦笑しかけたがすぐ眞顏になつて、

「お前は遠藤の方がよいのか……」
「……」
禮子も、他を捨てゝ遠藤を選ぶほど氣持は定まつてゐなかつた。
「遠藤だけだつたら、お前は遠藤の所へ行くつもりでゐたのか……」
「はい……」
と、禮子はかすかに答へた。
「さうか。さうか。しかし、お父さんとしても、山形も斷り切れないからなア、しかも山形を斷つて、親友の遠藤にやるわけにも行かないからなア。」
父は、手を拱いて考へ込んでしまつた。
しばらくして父は云つた。
「仕方がない。わしから、山形に事情を話さう。そして、山形と遠藤とに相談して貰はう。二人で相談して、何とか定めて貰ふことにするんだ。それが、一番穩健な手段だ。お前のためにあの二人の友情を傷つけてはならないからなア。それでいゝだらう。お前も……」
「はい。」

「二人が、一しよに來たことが、運命的なんだなア。二人とも立派な青年なんだが……」
父は、悵然として、嘆息した。

五

遠藤は松村禮子に求婚の手紙を出してから、三日間落着かない日を送つた。芝居へ招待した時の禮子の態度は決して悲觀すべきものではなかつた。素直に、此方の招待を喜んでくれ、觀劇を樂しんでくれた。場所柄を氣にしながら、自分の氣持を話した時だつて、相手はしんみりと本氣に聽いてくれた。遠藤は、禮子の態度ですつかり自信を持つて手紙を出したのである。速達だから、三時間もあれば屆く、すぐ返事を出してくれゝば、月曜日の午前中には、此方へ屆くだらうと思つた。月曜日には會社が退けると、心を躍らしながら、下宿へ歸つて見た。しかし、禮子の手紙は來てゐなかつた。きつと、兩親に相談したのであらう。さうすれば、一日や二日は、返事が遲れるのは仕方がない。さう思つて、彼は翌日を樂しみにした。が、翌日の火曜日にも返事は來なかつた。彼は、だん〳〵自信がうすれて不安になつて來た。松村先生は緣談を探したいと云つて居られたが、令孃は令孃として愛人があるのかも知れない。だから、

自分の手紙など、親の眼に見せないで默殺してしまふかも知れない。さう思ひながらも、彼は翌日を待つた。が、水曜日の夕方、早く歸つて見たが禮子の手紙は來てゐなかつた。彼は、すつかり悲觀してしまつた。やつぱり、自分の劇場に於ての不躾な話しぶりや、當人宛の露骨な求婚の手紙が、相手の感情を害したのだらうと思つた。彼は、あんなにあせるべきではなかつた。お孃さんに、直接でなく、松村先生にお願ひすべきではなかつたかしら、その方がよつぽど、自然ではなかつたかしら、そんな後悔で胸が一杯になつた。

下宿とは云へ、鄕里の知人關係の家なので、外に同宿人はなく彼は二階の廣い八疊に起臥してゐた。

いつもは、夕食後近所の道玄坂あたりへ散步に出るのだが、彼は手紙の來ないことで、すつかり憂鬱になり、緣側に出てゐる籐椅子に寢ころんだまゝで、今日歸りに東京驛で買つた事變關係の臨時增刊も讀む氣になれなかつた。

七時過ぎであつた。下宿の小學四年生の女の子が、勢よく階段を馳け上つて來た。

「遠藤さん！　山形さんが、いらつしつたわよ。」

と、云ふと返事も待たず、とん〳〵馳け降りて行つた。いつも、上へ通すのに定まつてゐる

客だからであつた。

遠藤は山形が來てくれたのが嬉しかつた。山形と話すことで、氣がまぎれるからであつた。籐椅子から身を起すと、部屋を出て階段口に立つて、下から上つて來る友達の顏を見ると、

「よう！」

と、聲をかけた。

が、山形は、一寸肯づいた丈で、ニコリともせずに、上つて來た。いつもの快活な山形とは、すつかり違つてゐた。

「何うした元氣がないね。何かあつたのかい？」

遠藤は、自分がさう訊かるべき事を相手に訊いた。

「うん……一寸ね。」

さう云ふと、山形はいつもの通の遠慮なさで、今迄遠藤の寢てゐた籐椅子に腰をかけると、懷から一通の手紙を取り出して、

「おい！　これを讀んでくれ！」

と、差し出した。

「何だい！」

と、遠藤は氣がるに受けとつて裏を見ると、松村良太と書かれてゐた。

「松村先生から君へ來た手紙だね。」

「うん。」

「何だい。」

「まあよんでくれ……」

山形の緊張した顏付きで、その手紙が自分にも、重大な關係があることが遠藤に直感された。

彼は、疊の上へ坐ると、既に開封されてゐる內容を取り出して見た。

彼は、最初二、三行讀んだ時に、愕然とした。

拜啓

昨日は失禮致し候。その節お話を承りし娘禮子御所望の件、早速當人にも申し聽かし候處、意外にも遠藤君より、直接禮子に對し同時に同樣の申込ありたるを知り、驚愕致し候。小生とし

ては、貴下御兩氏に對し、差別選擇を致すこと甚だ難く、かつ娘儀も平凡素直な性質にて、貴下達の申込に感謝致し居り候へども、一を捨て他を取るがごとき明確なる意志之なく、もし貴下達が御相談の上、適當なる御考慮を廻らし、圓滿なる解決をお示し下さらざる限は、御兩氏ともお斷り致す外なく候。舊師弟たる情誼上、この事に就いて、御兩人の中、孰れかの感情を傷つくるが如きは、小生の敢てし得ざる所に有之、當惑千萬に存じ居候。先は事情申し上げ、賢明なる貴下御兩人の善處を切望致すわけにて御座候。

先は用事まで。

松村良太

山形文男樣

遠藤は、讀んで行く內に、暗然としてしまつた。山形を恨む氣はちつともしなかつたが、たゞ境遇の皮肉さが、恨めしかつた。

山形はと見ると、兩手を胸に組んで、默々とうなだれてゐた。

遠藤は、出來る丈、朗かにこの事實に面したいと考へながら、

「困つたねえ。」
と、言葉をかけた。
「困つた。」
山形も、悲しげに苦笑した。
「松村先生の氣持は、僕達の中一人が諦めてくれたら、後の人にやると云ふのだらうね。」
「さうだ。それ丈に困るねえ。」
二人は、まただまつてしまつた。
しばらくすると、今度は山形の方から沈默を破つた。
「僕も一目見たときから、禮子さんがとても好きになつたんだ。君も恐らく、さうなんだらう。だから、僕も諦めるとは云へないんだ。云へば、自分でウソをついてゐる事になるんだ。それ丈に、君にも諦めてくれとは云へないんだ！」
「僕も同じだ！」
遠藤も、ハツキリ云つた。
「しかし、禮子さんを巡つて、君と僕とで、爭ふのも嫌だなア。と云つて二人とも諦められな

いとすると……」
山形は、そこまで云つて、自分でも分らなくなつてしまつたらしく、默つてしまつた。
「君が、最初僕を連れて行かなければよかつたんだねえ。」
と、遠藤が云つた。
「そんな事は、今更問題ぢやないよ。かう云ふ廻り合せなんだ。……それで……」
と、云つたが、それ以上は、何とも云へなかつた。
「ねえ。山形君！」
遠藤は、改めて云つた。
「何だ！」
「かうなれば、正々堂々と爭はうぢやないか。たゞ、お互ひに、紳士的に、相手を中傷したり妨害したりしないことにして……僕達の眞情が、どちらが早く禮子さんを動かすか、やつて見ようぢやないか。その代りどちらが負けても、恨まないことにして……」
遠藤の眼は、男らしい激情で輝いた。
「うん。しかし、辛いなア。」

「しかし、二人とも諦めることにしても辛いだらう。それより、二人とも行動を起した方が、氣が紛れるだらう。」
「うん。」
山形もうなづいた。
「たゞ禮子さんの家で、二人ぶつかつたりしたら、氣まづいし、同じ日に、禮子さんを誘つたりして、相手を苦しめるのも、嫌だから、僕はする事があれば偶數の日にやる。君は、奇數の日にやりたまへ！」
「仕合規定だね。」
山形は、苦笑した。
「お互ひに、嫌な思ひを必要以上にしたくないからだ。それで、いゝだらう。」
「うん。」
「そして、早く禮子さんの心を動かした方を勝にしよう。そして、負けた方は快く引き下らう。」
「うん。」

「さうするより仕方がないだらう。」
「うん。」
「ぢや、定めたね。」
「定まつた！」
「この問題以外は、お互ひの友情に、變化のないことを誓はう。」
と、遠藤が云つた。
「うん。誓ふ。」
山形が答へた。
「ぢや、禮子さんの話は、勝負の付くまで、お互ひ同志の間では、絶對に話さないことにしよう。」
「よし。」
「ぢや、氣を變へるために、散歩に出ようか。」
「出よう。まだ早いから、新宿へ行かうか。」
「行かう。」

二人は、友人らしく、一しよに立ち上つた。

六

山形は、その翌日丁度奇數日に當つてゐたので、早速松村先生を訪問して、遠藤と相談したことについて、先生の諒解を求めた。二人をしばらくの間、自由にお嬢樣と交際さして頂きたい、そしてお嬢さまの心に依つて、二人の運命を定めたい、そしてその選擇が、孰れに落ちようとも一人は、潔く身を退いて、他の一人の幸福なる結婚生活を祝福するつもりだと申し述べた。

松村先生は、苦笑したが、强ひて反對はしなかつた。先生としては、二人の中なら、誰に娘をやつても不足はないと思つてゐたからである。二人が同時に諦めると云ふ返事よりも、その方が先生としては、望ましかつた。

二人の競爭は、始まつた。しかし二人とも青年紳士であつたから、禮子を苦しめたり、松村家をさわがすやうな事はなかつた。たゞ禮子は悲しかつた、二人の愛情が同じ位に、烈しいのを知ると、中間に立つ彼女の立場は可なり心苦しいものであつた。この競爭が、自然のままに

發展したならば、どちらが勝つたであらうか。それは、誰人にも分らなかつた。

それは、十月〇日に、遠藤が突然召集令を受け取つたからである。彼は鄉里からの電報に接すると、決然として君國に盡す覺悟を定めた。鄉里の四國へ歸る旅裝を整へると、一番に山形のアパートへ馳けつけた。

彼は、驚く山形に對して云つた。

「ねえ。山形君、出征に際して君にお願ひがあるんだ！」

「何だらう！」

遠藤の顏が緊張してゐるので、山形も蒼然となつて訊き返した。

「外でもない。僕は禮子さんに對する競爭から、欣んで引き退る決心をしたんだ。だから、君は心置きなく、禮子さんと結婚してくれたまへ。禮子さんが、見知らない男と結婚するよりも君と結婚して幸福になることは、僕としてどんなに嬉しいか分らないんだ。」

遠藤の眼は、燃えるやうに輝いてゐた。

が、山形は考へもせずに云つた。

「いや、それは困る！」

「なぜ？……」
「だつて、君が國家のために、戰場へ行くのに乘じて、禮子さんと結婚するなんて、そんな馬鹿なことが出來るもんか。僕は、君が凱旋するのを待つてゐる。君が歸つてから、競爭をやり直すつもりだ。君が出征してゐる間、僕は禮子さんとは、絶對に交渉しない。それ丈は、天地神明に誓ふ。」
山形の眼も、涙にうるんでゐた。
「ありがたう。君の志は、ありがたく頂戴する。しかし、それは實際問題として困るんだ。そのために、禮子さんは婚期を失するかも知れないし、それに僕は生還を期すわけには行かないかも知れないんだ。だから、どうか僕に引き退らせてくれないか。僕は、禮子さんが君に依つて、幸福になると云ふことは、禮子さんを愛してゐる僕としても嬉しいんだ。どうか、うんと云つてくれないか。」
遠藤の言葉には、眞情が溢れてゐた。
「いや、斷然いかん！　君が出征するために、禮子さんを思ひ切ると云ふのなら、僕も思ひ切る！」

山形は、頑として云ひ放つた。
「さうか。」
遠藤は、感激してしばらく默つてゐたが、やつと顏を上げると、
「しかし、僕はこゝへ來る前、禮子さんには手紙を出して置いた。どうか、山形君と結婚してくれと云つて……」
山形も、驚いて遠藤の顏を見詰めてゐたが、
「君が、手紙を出したのなら、僕が手紙を出して取り消す。」
「君は、頑固だなア。」
さう云つて、遠藤は苦笑した。
「君こそ頑固だよ。この問題は、一先づ中止にして國のために働いてくれたまへ。賴む、僕は君の凱旋を待つてゐる……」
「しかし……」
「まあ、いゝよ。僕こそ君に誓ひたいんだ、僕は君が歸るまで禮子さんを、僕達二人の秘寶として、第三者には決して渡さないよ。そして、君が歸つたら、堂々と爭はう！」

遠藤も默つてしまつた。
「別盃を酌まうぢやないか。」
と、山形が誘つた。
「いや、その暇もないんだ。今夜十一時出發だ。ぢや君の說を入れてこの問題は一先づ中止にして置かう。」
「さうか。それなら、僕も嬉しい。握手しよう。身體に氣をつけてくれたまへ。武運を祈つてゐるよ。君の歸つて來る迄、僕は禮子さんに文通もしないつもりだ。だが、君は禮子さんから手紙をいくら貰つてもいゝよ。慰問の手紙を貰ふのは、戰場へ行くものゝ特權だから……」
二人は兩手をしつかり握り合はせて、感激の瞳を、いつまでも見合つてゐた。

七

召集された遠藤は、急激な訓練を受けた後、輜重部隊として上海に派遣された。肉體的勞働に殆んど經驗のない彼ではあつたが、君國のため股迄沒するやうな泥濘の中を馬を牽き車を押して奮鬪した。戰酣なる日は、戰鬪部隊と同じやうに機關銃の掃射の中を、追擊砲彈の炸裂

する中を、第一線へ糧食を運んだり彈丸を運んだりした。過去の生活も未來の生活も考へなかつた。目前に展開する壯烈な戰爭の外は、何も考へなかつた。
たゞ、夜營の夢がふとさめた時などは、禮子の事を考へた。禮子の彫刻されたやうに美しい顏が、暗の中にポツカリと浮んでゐた。が、彼女と結婚したいと云つたやうな慾望は少しも起らなかつた。たゞ、彼女のやさしい心が、自分の武運を祈つてゐてくれるだらうと思ふことが樂しかつた。山形の事も考へ出された。が、愛の敵手に對する敵愾心などは、少しも感ぜられなかつた。出征に際しての彼の男らしい申出が、ほゝゑましく思ひ出される丈であつた。死生を賭した戰爭が、人間の心持を淨化してくれたことが、彼には感謝された。自分が、戰死した後、禮子が山形と結婚するかも知れぬことも、彼としては嫌な空想ではなかつた。禮子も山形も出來る丈幸福になつて貰ひたいし、また自分も彼等の幸福を祈りたい氣持であつた。
戰地に着いてから、禮子に簡單なハガキを書いたが、それに對して、禮子から心をこめた、慰問袋が二度屆いた。最初の慰問袋には、彼女が街頭に立つて作つたと云ふ千人針が入れてあつた。
輜重部隊ではあつたが、彼の中隊にも戰死者が一人出來二人出來た。負傷者は、十數名に達

した。十月二十四日大場鎭が將に陷落しようと云ふ間際になつて、遠藤は第一線に彈丸を運搬中、迫擊砲彈の破片を、左顏面に受け、頰から顎へかけての肉をもがれてしまつた。

瀕死の重傷で、彼は三日間人事不省であつた。

幸に化膿しなかつたゝめに、彼は命を助かつた。野戰病院から廣島の病院へ後送された。十二月の末になつて、傷は全く癒えたが、頰から顎へかけての傷痕があまりに甚しいため、整形手術を受けるため、東京の赤十字病院へ轉送されたのが、今年一月の初であつた。

東京へ歸つて來ると、彼は急に出征前の生活が思ひ出された。禮子に對する愛情がしみじみと胸に蘇つた。しかし、彼は顏に受けた負傷のために、もう禮子に對して求婚する資格のないことを感じた。どんなに整形醫術が發達しても、顎が半分除れてゐるやうな傷が、ある程度以上、治癒する筈はないと思つたからである。山形が來たら、今度こそ彼に、禮子を讓らう。その方が、氣持がサバ〳〵していゝと思つた。

八

山形が、病院を訪ねて來てくれたのは、東京へ歸つてから三日目であつた。

「よかつたねえ。よかつたねえ。よく無事でゐてくれたね。」

山形は、遠藤の手を强く握りしめて、眼に涙さへ浮べてゐた。

「一時、君が戰死したと云ふ噂さへ傳つてね。君の鄕里の新聞には、戰死と出てゐたさうだね。」

「さうなんだ。三日間人事不省だつたんだ。僕が恢復したのは奇蹟だと云はれてゐるんだ！」

「おめでたう。おめでたう。」

山形は、心から欣んでくれた。

「しかし、ひどい傷だよ。自分で、自分の傷が見たくない位だ、まだ繃帶を取りたくないんだ傷はすつかり癒えてゐるんだが……」

遠藤は、さびしげに云つた。

「なあに、傷痕なんか。名譽の傷ぢやないか……」

遠藤は、暫くだまつてゐたが、

「それで、今度こそ僕は決心したんだ。僕は、禮子さんに對する僕の權利を放棄することにしたよ。僕は、もう資格がない。こんな顏になつちや、禮子さんに求婚する權利はないよ……」

山形は、同室の患者達に聞えないやうに、低くはあつたが、憤然として云ひ返した。

「馬鹿な事を云つちゃ困る。君こそ、禮子さんと結婚する權利をハツキリと獲得したんだ。君が無事に歸つて來たら、君と大に爭ふつもりであつたが、君にそんな負傷をされて見ると、僕はもう君と爭ふ權利はないんだ。君が考へるやうに、その傷を弱點と考へれば、弱點を持つ君と爭ふことは不正だし、また僕が考へるやうに、それを君の强味としたら、そんな大きい强味を持つてゐる君と爭ふことは、馬鹿々々しくなつたんだ。その上、禮子さんの心は、君が出征以來、君のものになつてゐるよ。一昨日僕は禮子さんに會つて、遠藤君が負傷した以上、ぜひ遠藤君と結婚して下さい、と賴んだら、禮子さんは快諾してくれたよ。それが當然だよ、それが自然なんだ、君が出征したことで、僕は負けたんだ。君に負傷されて見ると、もう勝目はなくなつたよ……」

「……」

默つて聽いてゐる遠藤の眼からは、熱い涙が湯のやうに流れ出して、顏の周圍を卷いてゐる繃帶にしみ入つてゐた。

丁度、その時看護婦に案內されて、禮子が美しい花束を手に持つて、ベッドの間を縫ひながら、遠藤の方へ近づいて來るのが見えた。

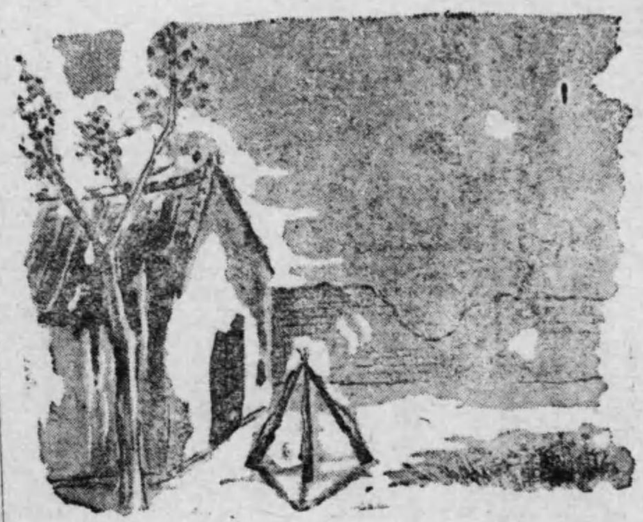
「あつ、禮子さんが來たよ。ねえ、遠藤！　素直に、禮子さんと婚約をしてくれたまへ。禮子さんは、今こそ君の方を愛してゐるんだよ。」

さう云ふと、山形は、

「一寸、此方ですよ。」

と、禮子をさし招いた。

野菊の兵士



「小島君！」

と、賣場の古參番頭である、日比さんに呼ばれて、晴世は整理中の傳票を置いて立ち上つた。

「これ取つて來て……」

と、つけ札を、五六枚渡されて、

「はい！」

と、賣場を離れた。

階段の處で調べると、男ものセーターと靴下、ダイヤモンドゲームに、折だたみの將棋盤、栗の罐詰と燒海苔の罐、安全かみそり、タオルに石鹸等々、一見して、慰問袋の內容であつた。

それ等の品物の賣場は、それぞれ違つてゐた。地下室にも行かねばならず、五階にも、三階にも行かねば、二階にも一階にも、行かなければならなかつた。

しかし、慰問袋の行先である兵隊さんの事を思へば、晴世はいざゝかも苦にならなかつたが、晴世は御得意先は、どちらだらうかと、つけ札を見た。

大和村高木と、どれにも書いてあつた。大和村の高木さんと云へば、晴世の居る三階の八番賣場での、大切なお得意の一つである。

奥樣か或は家人が、賣場を見て歩いて、ほしいものがあれば、名前丈を云つて（何番に通してくれ）と自分の家で買ひつけの賣場の番號を云つて置けば、品物はすぐ配達されて、勘定は月末拂ひになるいゝお得意である。

晴世は、紫の事務服の裾に、眞白い足袋と、新しいグリンの緒のついた草履をバタ〳〵云はせて、先ず食料品を持つて來るために、地下室への階段を降りた。もう暮近く、其處には、蜜柑の底光りするやうな黃金色の山があつた。

一階で化粧品部の品物を取り、二階へ來てセーターと靴下を取り、五階の玩具部で、ダイヤモンドゲームと將棋盤とを取り、一抱へになつた荷物を、店員通路から、自分の賣場へ持つて歸ると、日比に、

「御苦勞さま。」

と云はれた。

「高木さんのお宅では、さすがに素晴らしい慰問袋をお作りになるのね、これでは一袋三十圓

もかゝるわ。」

と、晴世が云ふと、

「御子息さんが、出征していらつしやるから、御子息さんに送るのだらう……。」

「あら、さうお。ちつとも知らなかつた。」

と、晴世は、高木家の奥様と、しば〳〵買物に連れ立つて來てゐる、「英彦」とお母さんから呼ばれる青年を、屢〻見て知つてゐるので、感に堪へた思ひでさう答へた。

二三年前は、帝大の制服で、お母さんと一しよに見えたが、いつの間にか背廣になつてゐた。坊つちやんらしい面影のまだ殘つてゐる青年紳士であつた。

(色んな方が、御國のために、銃を取つていらつしやるんだな)と、晴世は、その品々を、丁寧に傳票に移して、計算し、品物は發送部に廻した。

お店が閉まると、晴世は急いで、歸り支度をして、市電に乘つた。

晴世の家は、本所綠町にあつた。

姉妹と父とが、母と弟を殘して、働きに出てゐる一家であつた。

晴世が、一日中にお店内を、歩き廻る距離は計算すれば、何十丁にも及ぶので、身體に感ずる疲勞は、相當なもので、弟妹との夕御飯と夜の休息とを樂しみに、市電に搖られて歸るのであつた。

が、晴世は、女店員らしくない高雅なところを持つてゐた。

眞黑で潤澤な髪、上品な生え際、圓らな双眸、健康で誠實さうな唇元、清潔な白い衿もと、銘仙に赤い花模樣の帶をしめた彼女の姿は、お腹を空かして、晩のお菜を、あれかこれかと想像して歸る女店員とは、何うしても思はれなかつた。

ラッシュ・アワーのそれ〳〵忙しげな乘客の眼にも、彼女は楚々たる菊の花のやうに、映るらしく、彼女はいつも同車中の青年達の視線を蒐めてゐた。

被服廠近くで電車を降りると、自轉車や荷車や、うす汚い子供達の多い、コンクリートの途を歩き、なほ細い路次に入り、格子を開けると、直ぐ御不淨の匂ひのするわが家に歸つて來た。

色が黑いので、エチオピアのビアだけ取つて、ビア子と仇名のついた妹の君子が、勤先の本所の軍需工場から、もう歸つてゐて、小さい食卓には、御馳走が並んでゐた。晴世の好きな五色揚げもあつた。

「お姉さん！」
と、妹は御飯を運びながら、姉を呼んだ。
「何さ。」
「とても、すばらしい事が、あんのよ。」
「何？」
と、晴世も食卓の前に坐ると、
「これ！」
と、二通の封筒を差し出した。兩方とも同じ筆蹟で、軍事郵便と赤い印が押してあつた。
「お姉さんと連名で送つた慰問袋を受取つた兵隊さんからの返事が來たのよ。私にもお姉さんにも、手紙くれたのよ。とてもいゝ兵隊さんだわ。かへつて、私達の方が、慰問されてる見たいな手紙よ。後で、二人でお返事出しませうね。暮に、ボーナス貰つたら、又何か送つてあげたいわ……」
妹は、たいへんな張り切り方であつた。
彼女は、空腹であつたが、御飯をつける前に、その封書の裏を見た。

北支派遣部隊A部隊E隊　　高木英彦

と、書いてあつた。
高木英彦！
「あら、高木英彦つて、あら、あら……」
「何うしたのよ。お姉さん……」
「何うしたつて……あら、同名異人かしら……」
「こんな名前の人知つてるの……」
「私達の賣場のお得意に、高木さんて方があるのよ。そのお家の坊つちやんが出征してるの……やつぱり、英彦つて云ふの……」
「まあ……ちや、きつと同じ人よ。だつて、この方も東京ですつて……」
「さうお……偶然つて、こんなものかしら……私、今日この方に送る慰問品を、高木さんへお
屆けしたばかりよ。」
「まあ、奇縁ね……」

と、妹は黒い愛嬌のある顔に、圓らな眼を刮つた。

拜啓

小生は、幸運にも、御姉妹のお心こめられた慰問袋を頂戴しました一兵士です。

小生も、東京市の出身だけに、東京に住む貴女方からの贈り物は、一層嬉しく思ひました。

東京を離れて、既に五ケ月、いよ〳〵支那でお正月を迎へようとして居ります。

既に幾人かの戰友を失ひ、幾人かの戰友は傷つきましたが、その中に、僕は今日まで健在、病氣一つせず、ひたすら御奉公出來るのも、一重に銃後皆様が、僕達の武運長久を祈つてゐて下さるためだと思ひ、心嬉しくお禮申します。

この上は、武運短く散つた戰友の分まで、頑張るつもりで居ります。

お手紙に依りますれば、お二人とも、お家のために、働いていらつしやるとの事、それ丈に、お二人の心づくしの慰問袋は、有閑夫人からのものに比べて、一層身にしみます。

中でも、蚊とり線香は、たいへん役に立ちました。するめも大變珍らしく、御好意を何時までも嚙みしめて居ました。

何時も、お健やかに、お勸めの愉快ならんことを祈ります。

時々、東京の模様を、お知らせ下されば、何より嬉しく思ひます。

さよなら

高木英彦

と、書いてあつた。

晴世は、自分達の粗末な慰問袋が、英彦のやうな、何不自由ない家を持つた兵士の手に渡つたことが何となく氣にかゝつた。

今日、彼の家庭から送られた慰問品のどの一つも、第一等の高級品ではないか。それに比べると、自分達のキャラメル、手拭、ブロマイド、月遲れの婦人雜誌の入つた慰問袋は、何か茶番めくのではないかと思つた。

晴世は、五色揚げを口に運びながら、一寸憂鬱な顔になつた。

「お姉さん、何を考へ込んだの……とても、やさしい兵隊さんぢやない……私への手紙も讀んでよ。」

と、自分への一通を差し出した。

慰問袋、ありがたうございました。お二人の御容子を、手紙で知り、楽しい想像を致しました。（君子ことピア子……ピアは、エチオピアのピア）は、傑作ですね。隊の連中に見せましたところ、皆大欣びでした。到頭隊中で、一番色の黒い宮田上等兵が、それ以來、ピア田と云ふ仇名をつけられてしまひました。

この野菊は、さる戰場で、雪の如く白々と咲いてゐた一輪です。僕の手帖で、押し花になつたものです。

戰場からは、こんなものしか、お送りするものはありません。

どうぞ、いつもお元氣で、お暇の時お手紙下さい。

「素敵でせう！」

と、君子は姉の讀み了るのを待つて云つたが、ピア子と云ふ自分の仇名を、自分で吹聽する丈、まだ色氣など少しもなく、四肢のノビ〳〵と發達した彼女は、御飯を五杯喰べても、まだ足りないやうな顏をしてゐた。

「お姉さんも、返事書くでせう。お姉さんが、この人を知つてゐると云つたら、この兵隊さん

びつくりするでせう。」

「さうね。書いて見ませうか。」

才氣のある晴世は、今日一日の出來事を、そのまゝ彼に知らせてやるのも、戰陣のつれ〴〵を、慰める事だらうと思つた。

お忙しい軍務の中にも拘はらずお返事を賜はり、まことに嬉しう存じました。

妹の喜びやうも、お目にかけたい程でございます。

一つ私が、貴君のお身上について、豫言を致しませうか、貴君のびつくりなさるやうな……

それは、外でもありません、私の手紙と前後して、貴君のお家から、素晴らしい慰問袋が、お手元に屆くことでございます。これは、必ず當ります……。

でも、びつくりなさるには及びません。だつて、私はMデパートの店員でございます。そして、貴君のお邸の御用を承つてゐる八番賣場に居ります……これだけ、申し上げれば、私の豫言の種がお分りのことゝ思ひます。

私達のまづしい慰問袋を、あんなに喜んで下さつたことは、却つて勿體ないと思つてゐま

す。

姉妹で、貴君様の御無事を祈つて居ります。

晴世

野菊の兵士様

新年になつた。妹の君子は、七種迄休むことが出來たが、姉の晴世は三日からもう、店に出なくてはならなかつた。

元旦も二日も、たゞ暮の劇務の疲れを癒した丈で、格別に樂しいこともなかつた。

その五日の朝、軍事郵便が來た。野菊の兵士からであつた。

拜啓

お手紙うれしく拜見しました。

貴女が、Mデパートに働いて居られ、僕の家から僕に送る慰問袋の品々を扱はれたことを知り、全く驚いて了ひました。何と云ふ奇縁だらうと思ひました。それからの二、三日はその

樂しい驚きの裡に、色々と、貴女方御姉妹の生活を想像しながら、慰問袋の來るのを一日千秋の思ひで、待つてゐました。

昨日、その慰問袋をやつと、手にした僕は、その一品々々が、貴女から頂いたと同じに、貴重に思はれました。

僕等は、今暫らくこの小部落に、滯在してゐます。

武藏野の一部に居るやうな感じのする所です。釣好きは、釣を始めたり、動物愛護家は、山羊の子を可愛がつたりしてゐます。僕は、隊で連れてゐる陳と云ふまだ十六にしかならぬ少年と、いつも遊んで居ります。彼は、少し足りないところがありますが、日本語をよく話し、愛嬌があります。彼の希望は、戰爭が濟んだら、日本へ連れて行つてくれと云ふ事です。寫眞は、僕と陳少年です。

英彦

小島晴世様

貴女方、御姉妹の最近の寫眞があつたら、送つて下さいませんか。

と、書いてあつた。

手紙からは、素直な優しい性質が感じられた。

支那少年と一しよの寫眞は、いかにも良家の坊つちやんらしいふくよかな頰をしてゐるが、さすがに戰場やけのした立派な兵士の姿であつた。

晴世は、かすかな興奮を覺え、眉のあたりが、明るくなるやうな思ひがした。

彼女は、わざ〳〵新しく寫眞を撮つてから、手紙の返事を書いて同封して送つた。

それから、二人の手紙は、しば〳〵交換された。此方からの手紙に對する返事ばかりでなく、月に二、三回は、手紙をくれた。

相手の手紙にも、晴世の手紙にも、だん〳〵親しみと情熱とが加つて來た。

十日ばかりも、手紙が來ないと、晴世は、何か忘れものをしたやうに、落ちつかない氣持になつた。また、一寸お店で、樂しい事があつてもいやな事があつても、すぐそれを野菊の兵士に、傳へたり訴へたりするやうになつてゐた。

徐州の大會戰が、始まる少し前だつた。突然、英彦から思ひ改まつた態度で手紙が來た。

自分の戰場の生活を、こんなに慰めてくれた御恩は、一生忘れられない。今までの自分の生

活で、晴世こそ、自分に優しかつた第一の女性である。今、戰場に在つて、生還は期しがたいが、もし凱旋するやうな事になつたら、自分は貴女と結婚するつもりであるから、どうか豫め、僕の氣持を知つてゐて頂きたい。貴女に、愛人か許婚者があれば、諦めるが、でなかつたら、どうか僕の願ひを容れて、そのつもりで暮してゐてくれと云ふ、眞面目な、切々たる文面であつた。

晴世は、嬉しかつたが、嬉しさよりも悲しさの方が、大きかつた。

英彦の家は、名門であると共に、金持であつた。だが、晴世の家は、震災前までは、相當の商家であつたが、震災後は、沒落してしまつて、姉妹のわづかなサラリイで、やつと父母を養つてゐる。それに、十になる弟もゐた。

結婚など、未だ曾て考へた事がなかつた。まして、身分違ひの英彦などとの結婚は、絶對に遂げられぬ希望である。

聰明な彼女は、しつかりと自分を制した。自分の務としては、國のために戰つてゐる一青年の氣持を、樂しくすることが出來れば、それで充分で、それ以上の希望など持つてはならぬと思つた。

晴世は、細々と家庭の事情を書き、お志はうれしいが、自分としては、到底そんな夢を描くことが出來ない事を述べ、戰地にいらつしやる間は、いく度でもお手紙をかくが、どうか御交際は戰地にある丈にして頂きたいと書き送つた。

が、その返事を出したのを境に、英彦の手紙は、バツタリ來なくなつてしまつた。

間もなく、徐州の包圍作戰が開始され皇軍勝利のニュースが毎日の新聞の紙面を埋め、東京の街の夜が、戰捷の灯に輝いたが、英彦からの便は、來なくなつてしまつた。

手紙が來ないまゝ、三月經つた。さうなつて見ると、この半年の間、英彦の存在が自分の生活の上に、どんな大きいものであつたかゞ分つた。もしや、戰死でもされたのではないかと、毎日の新聞を、注意してゐたが、それらしい容子もなかつた。

七月の末に、晴世は思ひ餘つた末、賣場に來た英彦の母夫人に、英彦の消息を訊いて見た。

母夫人は、思ひがけない人からの質問に、眼を刮つたが、さすがに愛兒の安否を訊かれたのが嬉しかつたらしく、

「ありがたう……負傷をいたしましたが、命の方は、別條ないやうでございます……。」

と、答へた。

晴世は、ホツとした。が、それと共に、新しい心配が湧いた。負傷なら、手紙が書けないわけはない、それで手紙をくれないのは、きつと自分の斷りを、よく思はなかつたのだらう。やつぱり、戰場に在る人に對しては、「いづれその事はよく考へます」と、云つたやうな素直な返事をすべきではなかつただらうか。ハツキリ斷つたことが、相手の感情を傷けたのではなからうかと、晴世の胸は、また曇りつゞけるのであつた。

八月九月と消息がなかつた。

高木夫人は、お店に時々、顏を見せたが、晴世は再び英彦の消息を訊く勇氣もなかつた。

戰局は、いよ〳〵進展して、十月になると、武漢三鎭の陷落が待たれるやうになつた。

漢口が落ちてから三日目に、突然晴世の手に、英彦の手紙が屆いた。それは、もう戰地からでなく、內地からであつた。

拜啓

暫らく御無沙汰致しました。

僕は、今內地に送還され○○の陸軍病院に居ります。が、徐州會戰で右足を失ひ、右頰にも

傷を受けました、が、生命があればこそ、また貴女にお手紙を書くことが出來るのだと思ひ、戰死した戰友に對して、すまなくさへ思つて居ります。

貴女のお手紙を受けとつたのは、徐州への行軍が始まる日の午前でした。僕は、あのお手紙を見て、感動しました。貴女の正直さ、貴女の堅實な考へ方に感動したのです。僕は、貴女に對する思慕の思ひが、更に強くなり、貴女が何とおつしやらうとも、萬一凱旋したら、貴女の御兩親にお願ひし、貴女を説得するつもりでした。

が、萬事は既に、空しくなつてしまひました。宿營地を出て、行軍すること五日、僕の中隊は徐州の南方宿縣の近くで、三千餘の敵に包圍され、死闘四時間餘、中隊長を初め將校殆んど死傷され、准尉が中隊の指揮を取るに至りました。僕は最後まで頑張つて、奮闘しましたが、十米まで迫つて來た敵の手榴彈を受け、右足と顏とに重傷を負ひ、人事不省になつてしまつたのです。

轟々たるエンヂンの響きに氣がつくと、僕はトラックにのせられ、月光の荒野を搖られながら、野戰病院へ送られてゐたのです。

そこの野戰病院で、僕は右足と別れました。

顏面の傷も可なり大きく、いくら整形外科をやつても、みにくい痕が殘るだらうと思ひます。

例のお返事を頂いたとき、更に折り返し僕の決心を書くつもりでしたが、すぐ戰爭になつたので、書けませんでしたが、書けなかつたことは、今から思へば結局よかつたと思ひます。

貴女のおつしやつた通り、僕達の交際は、僕が戰場にゐた間のものにさせて頂くやう僕よりもお願ひいたします。

たゞ、この手紙は、貴女が戰場へ送つて下さつた數々の御親切に對するお禮の手紙として書かして頂くのです。

陰ながら、貴女方御姉妹が、末ながく御幸福になるやう祈つて居ります。

野菊の兵士

と、書かれてあつた。

晴世は、激しい感情の嵐に、包まれてしまつた。自分で、何う考へていゝか分らなくなつてしまつた。

たゞ、何か大きな力に惹きずられるやうに、英彦と會ひたくなつた。そして、英彦の傷つい
た身體と心とを、力一杯慰めたくなつた。
彼女は、身分も境遇も生活も、何にも考へられなくなつた。たゞ、英彦と一目だけ會ひたく
なつた。
その三日目が、丁度八の日の公休日であつた。彼女は、日歸りの豫定で、朝早く〇〇へ行く
三等車に乘つてゐた。

日本橋通二丁目藥種問屋鍋屋清兵衛の娘幸は、痢病でこの五六日ばかり生死の境を、出入してゐた。

可愛い盛りの四歳で、清兵衛にとつても、妻のおたねにとつても、掌中の珠より大切な一粒だねである。

清兵衛が三十五お種が三十二になるまで、子供がなかつたので、もう子供はないものと諦めて居た時に、生れて來た子だつたから、天にも地にも換へがたいほど可愛いのである。

その娘が、今年うゐ盆のお團子を喰べてから、急に病ひつき、出入の醫者では安心出來ず、御殿醫の山田道參まで呼び迎へて、いろ〳〵手當を盡くしたが、日一日と重態になるばかりであつた。

醫者を迎へる一方では、加持祈禱、まじなひ、神社佛閣への願かけなども、凡そ効驗があると云はれる萬事は、手を盡くした。

が、七日目の今日は、衰弱が增すばかりである。清兵衛は、朝から病兒の枕元に附き切つてゐたが、子供が病苦と戰づてゐる容子のいたましさを見てゐるのが堪へ切れなくなつて、そこを離れて次ぎの間へ立つと、後から隨いて來た女房に、

「俺はもう一度鬼子母神様へお參りに行つて來る。心魂を籠めてお願ひして見たら、何とか驗のないことはないだらう。」

と、云つた。法華宗であつたので、幸が生れて以來、何かにつけて雜司ヶ谷の鬼子母神にお參りしてゐる夫婦であつた。

「駕籠を云つてくれ。六つまでには歸つて來る。まさか、その間に何うと云ふことはないだらう。」

と、清兵衛は、良人に出て行かれる不安を訴へたおたねに云つた。

町駕籠が用意された。前後二人づつで擔ぐ早駕籠であつた。

お茶の水から飯田橋に出て、大曲りの江戸川堤を音羽へと、駕籠は飛ぶやうに早かつた。

鬼子母神の御門前に、駕籠が着いたのは、七つ少し前だつた。

幸が、發病してから、これが三度目のお參りであつた。

清兵衛は、誠心こめて祈願した。そして、幸の命が助かつたら、青銅の燈籠でも寄進しようと、心で誓つた。

暑い日の午後であつたから、參詣の人數は少かつた。が、御堂の賽の子の上で、清兵衛と並

んで十七八の少女が、さめ〴〵と泣きながら、祈願をこめてゐるのが、變に氣になつた。細面の美しい横顔に、後れ毛が二筋三筋亂れてゐるのを見ても、清兵衛同樣深い悲しみに閉されてゐる不幸な娘らしい。

清兵衛が、御堂を降りて石だたみの上を引き返してゐると、

「もし、旦那樣、旦那樣。」と、呼び止める者がゐた。

振り向いてみると、先刻横にゐた少女である。

鼻筋が通り、眼が少し吊り上つてゐるが、横顔で想像したよりも美しい少女である。

「何か御用で？」

清兵衛が、けゞんな顏付で答へると、少女はサッと顏を赤らめながら、

「一寸お話があるのでございますが。」

と、云つた。

「どんなお話か存じませんが、折あしく宅に取り込みがございますので……」

と、云ひかけると、少女は、

「お取込みと云ふのは、お嬢さまの御病氣の事でございませう。」

と、清兵衛の言葉を引き取つた。少女の清艶な顏に、微笑が走つたやうに見え、神秘的な光が、相手の眸の中に閃めいたやうに、清兵衛は思つた。

「はあ、はあ……實は左樣で。貴女樣はなぜ、またそれを御存じでございますか。」

清兵衛は、すつかり相手に壓倒されてゐた。

「仔細がございまして……此處では申し兼ねますの……一寸、そこらあたりのお茶屋で……」

と、娘は恥しさうにうつむいた。

「かしこまりました。參ります。」

これが、鬼子母神の與へて下さつた奇蹟であると、清兵衛は思つた。

三四軒境内に並んでゐるお茶屋の中で、時々休息する顏馴染の茶屋へ、清兵衛は、娘を案内した。

茶屋の一間へ清兵衛と連れ立つては入つた娘は、清兵衛と近々と坐つた。こんな場合でなかつたなら、好き心をそゝられたかも知れないほど、娘は色つぽく清兵衛に身を近づけてゐた。

「お話と云ふのは……」

と、清兵衛が促すと、娘はモヂ〴〵と、身をくねらせてゐたが、やつと思ひ切つたやうに、

「私の申すことを、僞だとお考へになれば、それ迄でございますが、もし私の望みを叶へて下さるのでしたら、私もお嬢様の御病氣を本復させる事が出來ると思ひます。」

と、云ひ出した。

「ほゝう……」

清兵衛は、呆氣にとられて相手の顏を見詰めてゐた。

「私は、假に人間の姿を致して居りますが、本當は目白に住んで居ります狐でございます。」

娘の顏が蒼白になり唇が、わな〳〵ふるへた。

「たゞ、父を助けたさに、人間の姿となつて貴君様に、お願ひするのでございます。私の父は、三日前に目白の里人に捕はれ、明日か明後日は生肝を取られるために、本所邊の醫師に賣られることになつて居ります。この里人にお會ひになつて、父を購ふて放して下さる方は、旦那様より外にないのでございます。もし私の云ふ事をお信じになつて父を助けて下さいますやうなら、そのお禮に、お嬢さまの御病氣は、いかにもして本復させて、お目にかけるつもりでございます。」

娘は、眼に涙を一杯浮べて消え入りさうに云つた。

清兵衛は、話を聞いてゐる内に、何か人間以上の力を、ひし〳〵と感じて、娘の言葉を信ぜずにはゐられなかつた。それと共に、父を思ふ相手の眞劍さに、狐とか人間とかの差別なく心を惹きつけられた。

「よろしう御座います。お父さまの事はお引き受け致します、これから駕籠を急がせて、すぐ參ります。どうぞそのお父様の捕はれて居られる場所を、敎へて下さいませ。」

娘は、目白不動から、西へ一丁ばかり行くと、竹藪がある。その藪の端にある百姓家に、父が捕はれてゐると敎へた。

鬼子母神から不動堂へは、十丁ばかりであつた。

竹藪の端にあると云ふ家は、すぐ見つかつた。大きい百姓家で、垣も何もなかつた。

六十近くの、百姓としては日焦のしてゐない老人が緣側に、腰をかけてゐた。そして、清兵衛の駕籠の止まつたのを、不思議さうにして見てゐた。

「一寸物をお訊ねしますが、お宅様に、狐を飼つてお出でせうか。」

清兵衛は氣が急いてゐたので、そんな風にいきなり話し出した。

「そんなものは、飼つて居りません。」

老人は、ニコリともせず答へたが、すぐ、
「誰から、そんな事をお訊きなされた？」
と訊き返した。
「いや別に、……たゞ心願がございまして狐を探してゐるのでございますが。」
「それで、わざ〳〵此處らあたりまでお出かな。それは、御苦勞ぢや、お茶なと召し上れ……」
老人は、さう云ふとお茶の支度にと奥へ、は入つて行つた。
清兵衛は、娘に敎へられた家は、此の家より外にないと思ふと、容子を探るつもりで、緣側に腰かけながら、あたりを見廻した。
老人の息子らしい男が、庭の夏草を鎌で刈り取つてゐたが、清兵衛に目禮した。
老人が、番茶を運んで來てくれた。清兵衛は、そのお茶を飲みながら、ふと土間に眼をやると、そこに置いてある藁包みがもく〳〵と動いたかと、思ふと狐の尻尾らしいもの丶端が、藁からはみ出してゐるのが見えた。
清兵衛は喜びで、胸がはりさけさうだつた。
「もし、もし、あれは狐ではございませんか。」

老人は、ニヤツと笑つて、
「お目に止まりましたか、狐でございます。」
一寸、きまりが悪さうに云つた。
「あれを、私に讓つて頂けませんでせうか。」
と、清兵衛は、かけてゐる腰を老人の方へ進めながら云つた。
「いやあ、あれは困ります。一月も前から本所のお醫師から頼まれてゐたのを、雜司ヶ谷の森で、一昨日やつと捕まへたばかりでございます。三四度も催促を受けてゐるので、折角ですけれどあれは他へは讓れません。」
「左樣ではございませうが、代金の事なら、お望み通り差しあげますから。」
「いやあ、こんな事は代金の事ばかりではありませんからなア。」
と、老人は相當一克ものらしい。
「いやあ、これは私の申し違ひでございました、實は私の娘が、大病でございまして、あるト
ひ師の話では、狐を放してやることが病氣を本復させる何よりの功德になると聞きましたので
子を思ふ親の一心から、狐を見ると一疋でも助けて放したいのでございますが……」

と、清兵衛は、一生懸命になつた。

「なるほど……」

老人は、強く肯いたが、それきり話を進めようとはしなかつた。

「如何でございませうか。特別の思召で、私に譲つて頂けませんでせうか。たつた一人の娘でございますから、親心にはどんな事でもしたいと思うてゐるのでございますが、只今懐中には九兩しか持ち合はせがございませんが、不足の分は明日でもお屆けすることに致しまして……」

清兵衛は、いつか哀願するやうな口調になつてゐた。

足輕の年俸が、五兩などと云ふ時代であるから、九兩と云へば狐の代價としては、莫大もない大金である。老人は、少しうつむき加減に、まだだまつてゐた。

「ねえ、お父さん！」

氣がつくと、草を刈つてゐた息子が、いつの間にか、縁先に來て立つてゐた。

「お客様が、あゝまでおつしやるんですから、譲つてお上げになつたら、何うでせう。二、三日の中に、私がきつと代りの狐を捕へますよ。この狐が、お客様の眼についたのは、この狐の仕合せでございますよ。生肝を取らうと云ふ方へ賣るよりも、このお客様に賣つた方が、私達

としても寢覺がいゝではありませんか。狐捕りを商賣にしてゐても、その位の慈悲心は持つた方がいゝのぢやないでせうか。」

清兵衛には、息子の取り成しが、嬉しかつた。

「ありがたうございます。ありがたうございます。ぜひ、どうぞ、此の狐丈は私に譲つて頂きたいと思ひます。何卒、何卒。」

清兵衛は、つゞけざまに頭を下げた。

老人は、やつと心が折れたらしい。

「ぢや、お前に委せよう。お前のいゝやうにせい。」

老人は、息子に云ふと、奥へは入つてしまつた。

「どうも、父は一克者でございまして……」

息子は、愛想笑ひをしながら、縁側へ腰をかけると、

「あのまゝで、お持ちになりますか。」

と、云つて訊いた。

「とてもの事に、貴君の手で放して頂けませんか。」

「かしこまりました。」
「代金は、此處へ置きます。」
清兵衛は、財布から小判を出して縁側へ置いた。
「そんなに、頂かなくてよろしうございます。」
「まあ、さうおつしやらずに、貴君樣の御厚志で、讓つて頂けたのですから、貴方樣には、明日きつとお禮金を別にお屆け致します。」
「こんな大金を頂いた上に、私まで禮金を頂いたのでは、冥利が盡きます。」
「いえ、いえ、私は大へん御恩を被つてゐるのですから、氣の濟むやうにさせて頂きます。」
「いや、それでは却つて……どうぞ、そんな御心配は御無用に。」
清兵衛は、それ以上は云ひ爭はなかつた。相手が辭退しても、明日此方から屆けさへすればいゝと思つたからである。息子は、よれ〳〵の浴衣を着てゐたが狐捕りなどを商賣にしてゐるとは見えないほど、上品な所があつた。息子は、土間へ行くと、藥包みを解いた。
「こいつは、よほどの古狐でございますよ。背中の方が、少し白茶けてゐるでございませう。」
「なるほど。」

清兵衛は、娘さへあんな通力があるのだからと思ふと、敬虔な氣持で、手足と口とをくゝられてゐる老狐を、見おろした。
若者は、手足の繩を解き、口をくゝつた繩が頭の方にかゝつてゐるのを解いてやつた。
手足の繩を解かれるにつれて、烈しく身もだえしてゐた狐は、若者が手を放つと、アッと云ふ間に、立つてゐる清兵衛の足元をかすめて、庭つゞきの竹藪の中に、飛び込んでしまつた。
清兵衛は歸りの駕籠の中で、久しぶりに晴々とした氣持になつてゐた。これが鬼子母神が、自分の祈願を叶へてくれた奇瑞であると思つてゐた。
通二丁目の家に歸つた時は、永い夏の日が、とつぷり暮れてゐた。
出迎へた女房に、
「どう、幸は」と、云つて訊くと、
「貴君、お喜びなさいませ。七つ過ぎから、熱が急に下つたやうでございますよ。それに、お粥も湯を二さじばかり、咽喉に入れましたよ。」
「さうだらう。さうだらう。ありがたい事ぢや、ありがたい事ぢや。」
清兵衛は相好をくづしてよろけ込むやうに、幸の病室へは入つて行つた。

×

翌朝、幸は目に見えて快方に向つてゐた。

清兵衛は、手代に小僧をつけて、昨日の若者に、五兩丈屆けさせた。

が、夕方近く歸つて來た手代は、清兵衛に敎はつた家は、なるほど在ることはあつたが、その家に住んでゐた人達は、昨日の夜の間に、何處とも知らず引越して行つた。近所で訊くと、もと〳〵その家に、三四日ばかりゐた丈だから、何處から來たのか何處へ行つたのか、てんで分らないと云ふ返事であると云ふのである。

清兵衛は、あの親子までが、何か不思議な存在に考へられた。

しかし、そんな事は何うでもよかつた。幸が、日一日と快方に向つて行くのを見ると、鬼子母神の境內であつた狐の娘も、狐を賣つて呉れた親子も、清兵衛にとつて、娘の命の恩人のやうにありがたかつた。

しかし、事柄が怪奇な事である丈に、妻以外には誰にも語らなかつた。

それは、寛保二年七月の事であつたが、翌年の二月、清兵衛は思ひがけなく、町奉行所から呼び出された。呼び出しに來た同心は、清兵衛から金をかたり取つた犯人が捕まつたので、そ

の證人になるための呼び出しであるから、少しも心配する事はないと云つてくれたが、清兵衛としては、いつ金をかたり取られたのか、てんで心當りがなかつた。

奉行所の白洲で、かゝりの與力の前で、清兵衛がかしこまつてゐると、繩を打たれた若い娘が引き出されて來た。清兵衛は、氣の毒な氣がして顏を見ようとはしなかつた。

「清兵衛、この女に見覺えがあるか。」

「はつ！」

清兵衛は、やつと顏を上げて、引き据ゑられてゐる娘を見た。それは、まぎれもなく去年の夏の日鬼子母神境內で會つた狐の娘であつた。その娘を見た刹那に、清兵衛は感謝の念で、胸があつくなつた。

「あつ、あの節は、ありがたうございました。おかげで、娘はあれから、メキ〳〵とよくなりまして今では、風邪一つ引きません。ありがたうございました。ありがたうございました。」

「清兵衛、まだお前はだまされてゐるのか。この女は、お前の娘の病氣を癒してやると申して、野良狐を大金で買はせたであらうが。」

「いゝえ、勿體ないことでございます。この方のお蔭で、私の娘は助かりました……私にとつ

て……」

「だまれ〳〵、清兵衛！　まだ、お前はだまされてゐるのか、この女は親兄と共謀致し……」

與力は、清兵衛の蒙を啓かうとして、叱咤した。

が、清兵衛は、娘に對する感謝の心で一杯であつた。その親の縛を解いてやつたやうに、何うにかして、この娘の縛を解いてやりたいと思つてゐた。

娘は、蒼い横顔を見せて、うなだれてゐた。

東宝書店

出文協承認ア250060號

（3000部）

昭和十七年九月三十日印刷
昭和十七年十月　四　日發行

新版
野菊の兵士

定價一圓七十錢
送料十五錢

著作者　菊池寛

發行者　西村晋一
東京市淀谷區代々木富ケ谷町一四八二番地

印刷者　青野仙吉
（東東一〇三）
東京市芝區田村町四ノ二
株式會社青野印刷所

發行所　株式會社東寶書店
東京市麹町區有楽町一丁目六
電話銀座（57）八二九一—七番
振替口座東京一七五〇九七番
會員番號——一二〇五四八號

配給元　日本出版配給株式會社
東京市神田區淡路町二丁目九

425
239

東實書店●刊

三宅周太郎著　**俳優對談記**　一流俳優藝談錄　定價二圓二十錢

井上友一郎著　**南京の胡弓**　大陸小說隨筆集　定價一圓七十錢

半田義之著　**綺麗な娘**　書下し長篇小說　定價一圓九十錢

トルストイ夫人
ドストイエフスキイ夫人　**結婚をめぐりて**　文豪と結婚生活　定價一圓五十錢

阮攸著●小松清譯　**金雲翹**　安南の國民文學　定價二圓

穗積重遠著　**獨英觀劇日記**　九月下旬刊行　定價二圓五十錢

（各冊共送料十五錢・外地送料五十錢）

終